

## Ⅱ. 技能実習指導員へのアンケート調査結果



## II. 技能実習指導員へのアンケート調査結果

本事業では、介護職種の技能実習指導員に対してアンケート調査を実施し、現在の介護技能実習評価試験に対する介護現場での指導における整合の状況等について検証を行なった。

調査名	介護技能実習評価試験に対する、介護現場での技能実習指導の適応状況に関する実態調査（アンケート調査）
調査対象施設・事業所	介護技能実習評価試験の実績が累計3件以上の技能実習実施者（介護事業所）の技能実習指導員
想定回答者	実習実施者に所属する技能実習指導員
調査実施期間	令和5年12月11日（月）～令和6年1月19日（金）
調査手法	WEB調査（メールによる調査依頼、回答はアンケートサイトにて取得）
発送件数	2,859件
有効回答件数	1,133件（完全回答件数）
回収率	39.6%

### 1. 実習実施者（施設・事業所）の属性

#### (1) 施設・事業所の所在地（都道府県）

「東京都」が最も多く7.5%、次いで「神奈川県」6.4%、「大阪府」6.3%であった。回答施設数に差はあるものの、47都道府県全てのエリアから回答を得られた。

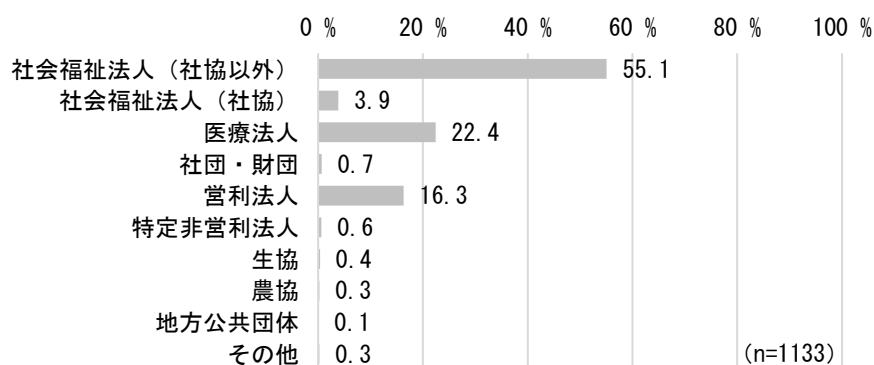
図表 8 所在地（単数回答）

	n	%		n	%		n	%
北海道	35	3.1	石川県	4	0.4	岡山県	25	2.2
青森県	7	0.6	福井県	5	0.4	広島県	49	4.3
岩手県	9	0.8	山梨県	12	1.1	山口県	16	1.4
宮城県	10	0.9	長野県	29	2.6	徳島県	9	0.8
秋田県	13	1.1	岐阜県	25	2.2	香川県	21	1.9
山形県	2	0.2	静岡県	30	2.6	愛媛県	46	4.1
福島県	8	0.7	愛知県	69	6.1	高知県	5	0.4
茨城県	29	2.6	三重県	29	2.6	福岡県	53	4.7
栃木県	18	1.6	滋賀県	11	1.0	佐賀県	7	0.6
群馬県	24	2.1	京都府	23	2.0	長崎県	14	1.2
埼玉県	47	4.1	大阪府	71	6.3	熊本県	15	1.3
千葉県	44	3.9	兵庫県	55	4.9	大分県	18	1.6
東京都	85	7.5	奈良県	16	1.4	宮崎県	7	0.6
神奈川県	73	6.4	和歌山県	11	1.0	鹿児島県	23	2.0
新潟県	15	1.3	鳥取県	3	0.3	沖縄県	6	0.5
富山県	5	0.4	島根県	2	0.2			
計							1,133	100.0

## (2) 法人種別

社会福祉法人（社協以外）が55.1%と過半数を占め、次いで医療法人22.4%、営利法人16.3%であった。

図表 9 法人種別（単数回答）

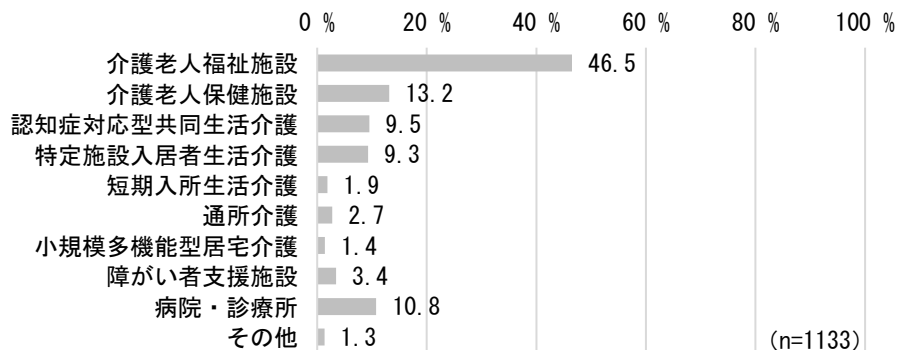


(\*その他： 国家公務員共済組合連合会 等)

## (3) 施設・事業所の主なサービス種別

「介護老人福祉施設」が46.5%と最も多く、次いで「介護老人保健施設」13.2%、「病院・診療所」10.8%の順であった。

図表 10 主なサービス種別（単数回答）



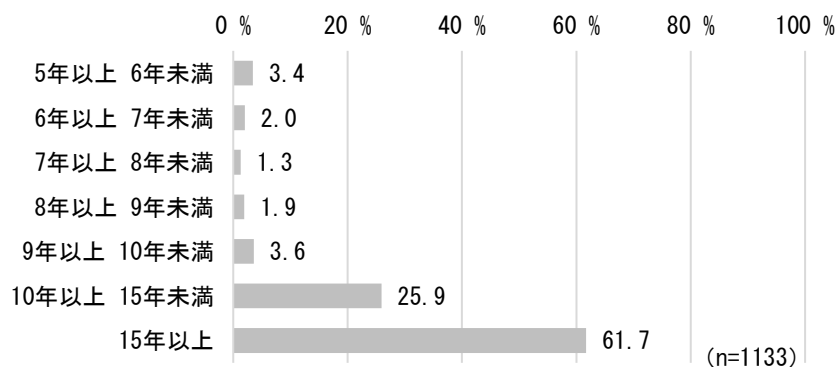
(\*その他： 介護医療院、通所リハビリテーション、看護小規模多機能型居宅介護、救護施設等)

## 2. 回答者（技能実習指導員）の属性

### (1) 介護業務経験年数

技能実習指導員である回答者自身の介護業務経験年数は、「15年以上」が最も多く61.7%、次いで「10年以上15年未満」25.9%、「9年以上10年未満」3.6%と、経験年数10年以上の技能実習指導員が、9割弱を占めた。

図表 11 介護業務経験年数（単数回答）

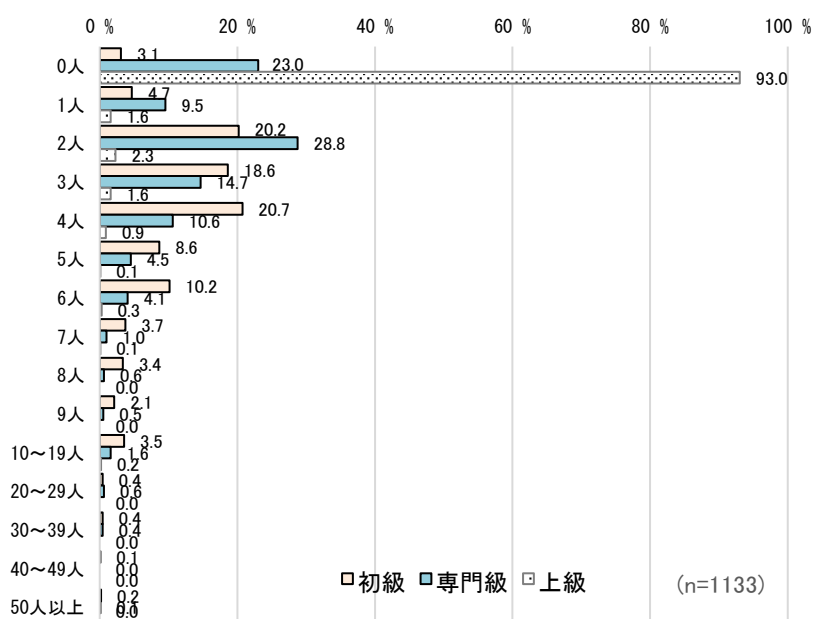


### (2) 技能実習指導員としてこれまでに担当した技能実習生の人数

技能実習指導員である回答者がこれまでに担当した技能実習生のうち、

- ・ 初級の評価試験を受検した技能実習生は、「2人」、「3人」、「4人」がいずれも20%前後で合計すると59.5%と過半数を占める。（平均値：4.5人、中央値：4.0人）
- ・ 専門級の評価試験を受検した技能実習生は、「2人」が最も多く28.8%、次いで「0人」が23.0%であった。（平均値：2.7人、中央値：2.0人）
- ・ 上級の評価試験を受検した技能実習生は、「0人」が93.0%と最も多かった。（平均値：0.2人、中央値：0.0人）

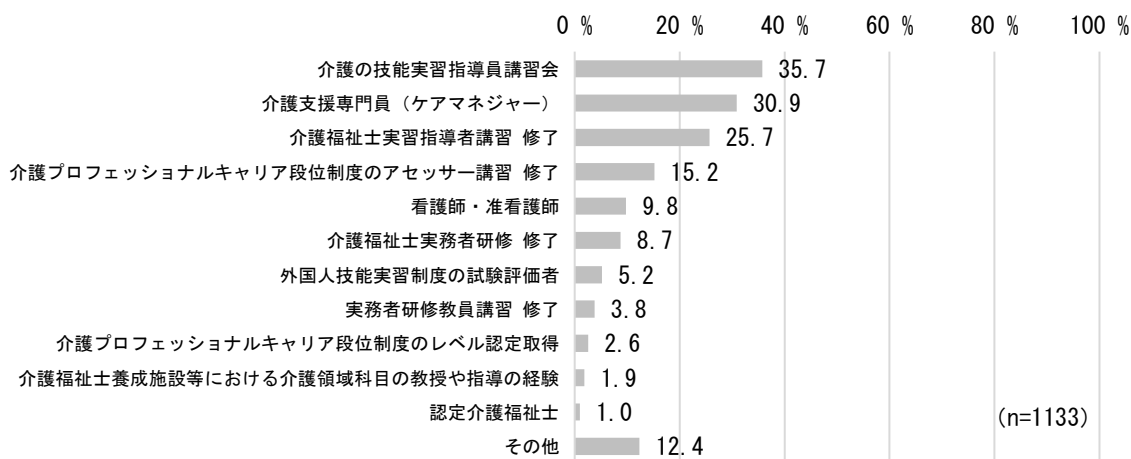
図表 12 これまでに担当した技能実習生の人数（単数回答）



### (3) 回答者（技能実習指導員）の資格または受講した講習等

「介護福祉士」資格以外で、回答者自身が有する資格または受講した講習等を伺ったところ、「介護の技能実習指導員講習会」が最も多く 35.7%、次いで、「介護支援専門員（ケアマネジャー）」30.9%、「介護福祉士実習指導者講習 修了」25.7%の順であった。

図表 13 回答者（技能実習指導員）の資格または受講した講習等（複数回答）



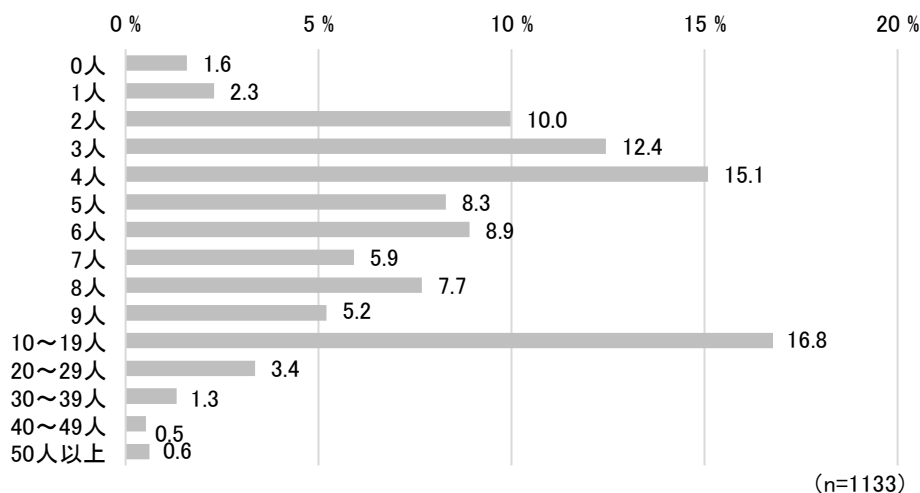
(\* その他：社会福祉士、保育士、管理栄養士、作業療法士、理学療法士、精神保健福祉士、日本語教師他)

## 3. 外国人介護人材の受入れ状況

### (1) 2023年12月1日時点における外国人介護人材の累積人数

回答施設・事業所における外国人介護人材の累積人数は、「10～19人」が最も多く 16.8%、次いで「4人」15.1%、「3人」12.4%の順であった。（平均値：7.8人、中央値：6.0人）

図表 14 外国人介護人材の累積人数（2023年12月1日時点）（単数回答）

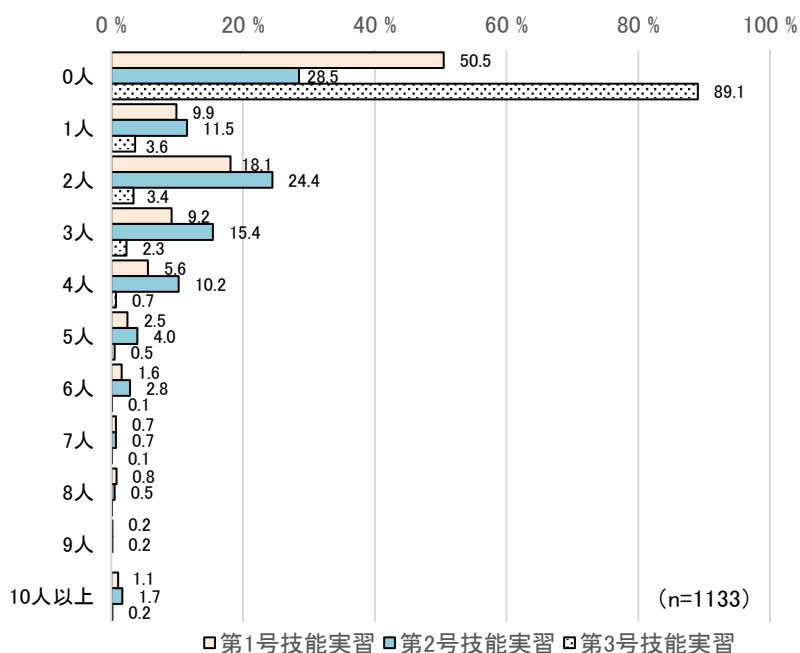


(2) 2023年12月1日時点における技能実習生の人数（在留資格別）

回答施設における、在留資格別の技能実習生の人数については、

- ・ 第1号技能実習では、「0人」50.5%、次いで「2人」18.1%、「1人」9.9%の順であった。（平均値：1.4人、中央値：0.0人）
- ・ 第2号技能実習では、「0人」28.5%、次いで「2人」24.4%、「3人」15.4%の順であった。（平均値：2.2人、中央値：2.0人）
- ・ 第3号技能実習では「0人」が89.1%と約9割であった。（平均値：0.3人、中央値0.0人）

図表 15 在留資格別技能実習生の数（2023年12月1日時点）（単数回答）

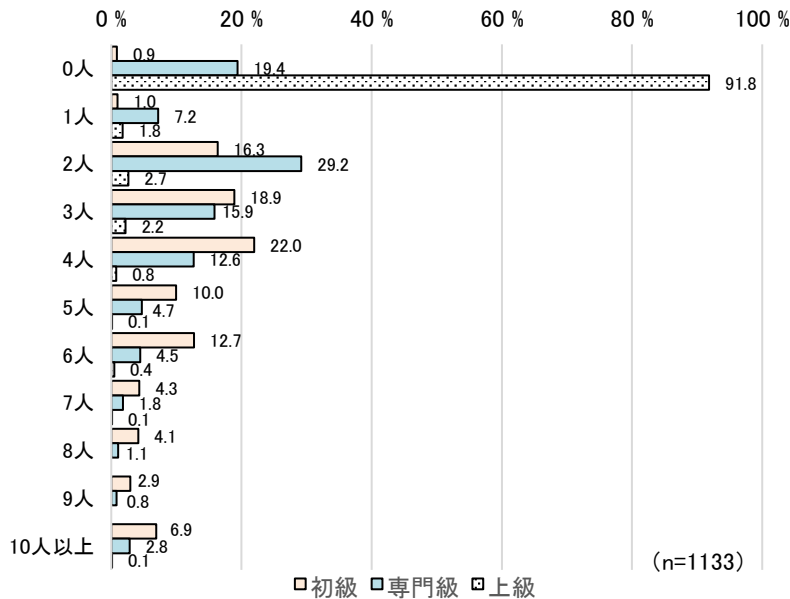


### (3) 2023年12月1日現在までの技能実習生の評価試験受検実績

回答施設・事業所における、技能実習生の評価試験受検実績人数の累計は、

- ・ 初級では、「4人」が最も多く22.0%、次いで「3人」が18.9%、「2人」が16.3%と、これらを合計すると57.2%と過半数である。(平均値：5.0人、中央値：4.0人)
- ・ 専門級では、「2人」が最も多く29.2%、次いで「0人」が19.4%、「3人」が15.9%であった。(平均値：2.7人、中央値：2.0人)
- ・ 上級では、「0人」が91.8%と大多数を占めた。(平均値：0.2人、中央値0.0人)

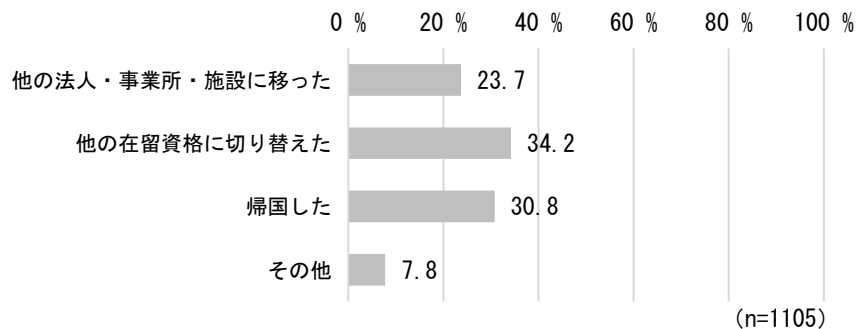
図表 16 技能実習生の評価試験受検実績 (2023年12月1日時点) (単数回答)



### (4) 次の級に進まなかった技能実習生がいる場合の理由

次の級に進まなかった技能実習生がいる場合の理由を伺ったところ、「他の在留資格に切り替えた」が34.2%、「他の法人・事業所・施設に移った」が23.7%であり、技能実習制度として次の級に進まなかった場合でも、介護業務に引き続き携わっていることが読み取れる。

図表 17 次の級に進まなかった技能実習生がいる場合の理由 (複数回答)



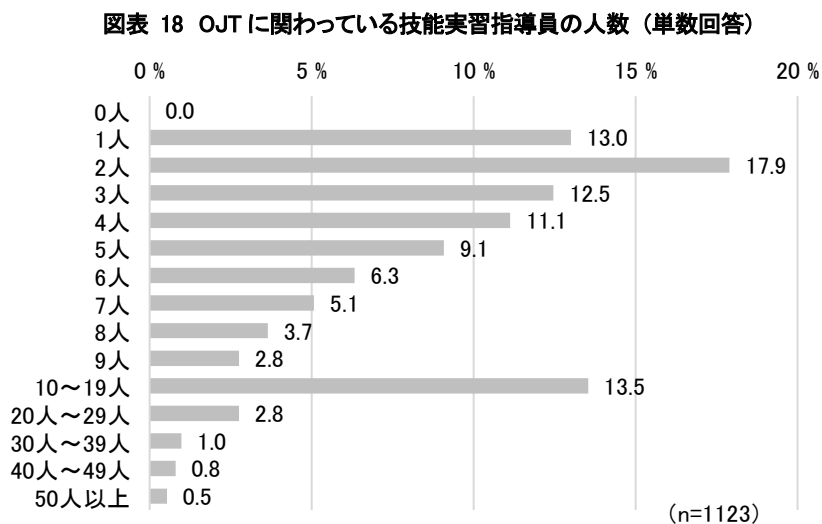
(\* その他：妊娠を理由に退職、婚姻を理由に退職、他の業種に就職した、別の職種に変わった等)



#### 4. 施設・事業所の技能実習生に対するOJTの「体制」

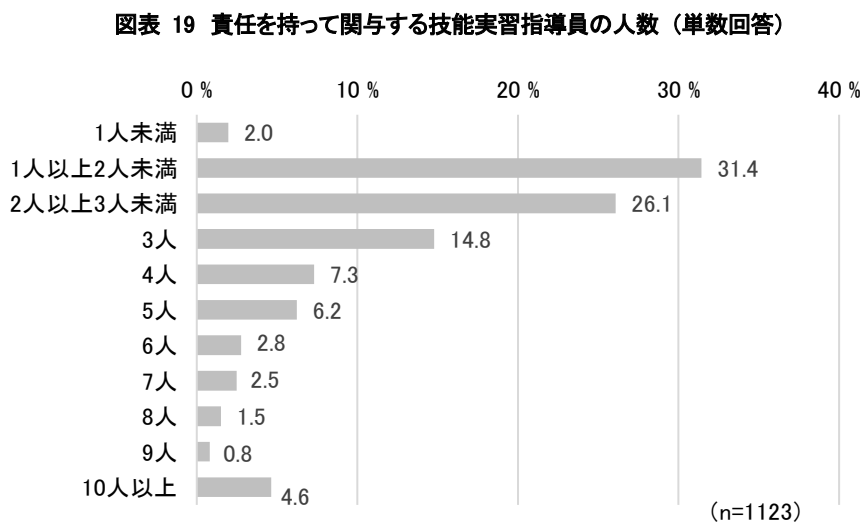
##### (1) 技能実習生のOJTに関わっている技能実習指導員の人数

技能実習生のOJTに関わっている技能実習指導員の人数は、「2人」が最も多く17.9%、次いで「10～19人」が13.5%、「1人」が13.0%であった。(平均値：6.5人、中央値：4.0人)



##### (2) 1人の技能実習生に対し責任を持って関与する技能実習指導員の人数

1人の技能実習生に対し責任を持って関与する技能実習指導員の人数は、「1人以上2人未満」が最も多く31.4%、次いで、「2人以上3人未満」が26.1%、「3人」が14.8%であり、これらを合計すると72.3%と半数以上を占める。(平均値3.2人、中央値2.0人)

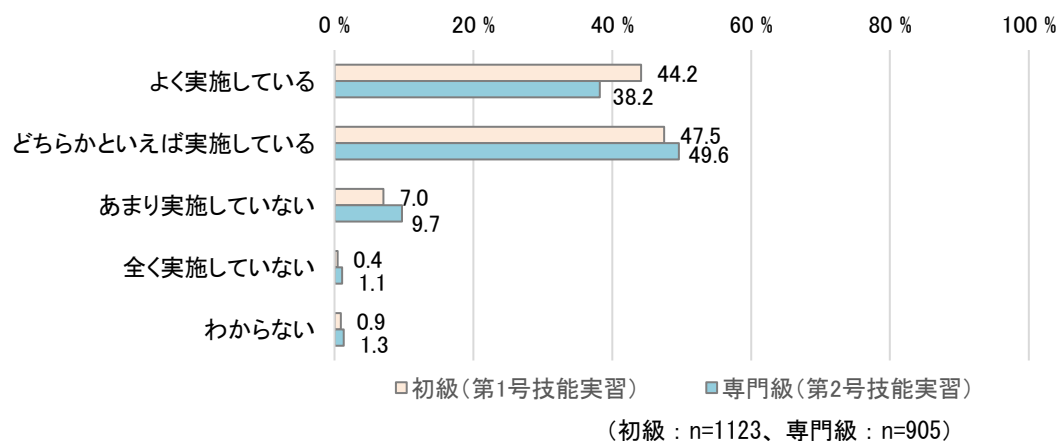


## 5. 技能実習生に対する実習指導状況

### (1) 介助手法や対応方法に関する指導者間のすり合わせ状況

指導者間で介助の手法や対応方法のすり合わせを行っているか否かについて、「よく実施している」と「どちらかといえば実施している」を合わせると、初級は91.7%、専門級は87.8%が「実施している」と回答した。初級・専門級に関わらず、9割近くの事業所において、指導者（技能実習指導員等）間で指導内容のすり合わせが行われていることがうかがえる。

図表 20 介助手法や対応方法に関する指導者間のすり合わせ状況（単数回答）

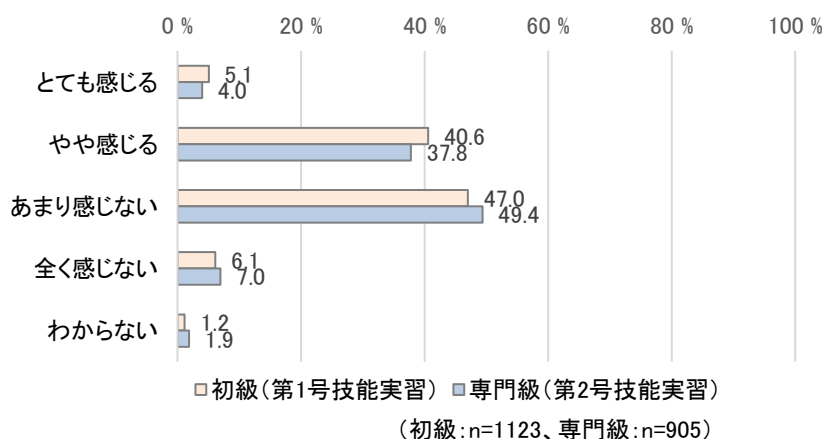


介助手法や対応方法に関する 指導者間のすり合わせ状況	初級 (第1号技能実習)		専門級 (第2号技能実習)	
	n	%	n	%
よく実施している	496	44.2	346	38.2
どちらかといえば実施している	533	47.5	449	49.6
あまり実施していない	79	7.0	88	9.7
全く実施していない	5	0.4	10	1.1
わからない	10	0.9	12	1.3
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

## (2) 指導者間で介助手法や対応方法に相違や齟齬が生じると感じること

指導者によって介助手法や対応方法の違いや齟齬が生じることはあるか否かについては、「とても感じる」または「やや感じる」と回答した方は、初級 45.7%、専門級 41.8%であった。一方で「あまり感じない」、「全く感じない」という回答も半数強であり、指導者（技能実習指導員等）による指導内容の違いや齟齬については、認識している事業所（指導員）と、認識していない事業所（指導員）で半々に分かれていると読み取れる。

図表 21 指導者間で介助手法や対応方法に相違や齟齬が生じると感じること（単数回答）



介助手法や対応方法に関する 指導者間のすり合わせ状況	初級 (第1号技能実習)		専門級 (第2号技能実習)	
	n	%	n	%
とても感じる	57	5.1	36	4.0
やや感じる	456	40.6	342	37.8
あまり感じない	528	47.0	447	49.4
全く感じない	69	6.1	63	7.0
わからない	13	1.2	17	1.9
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

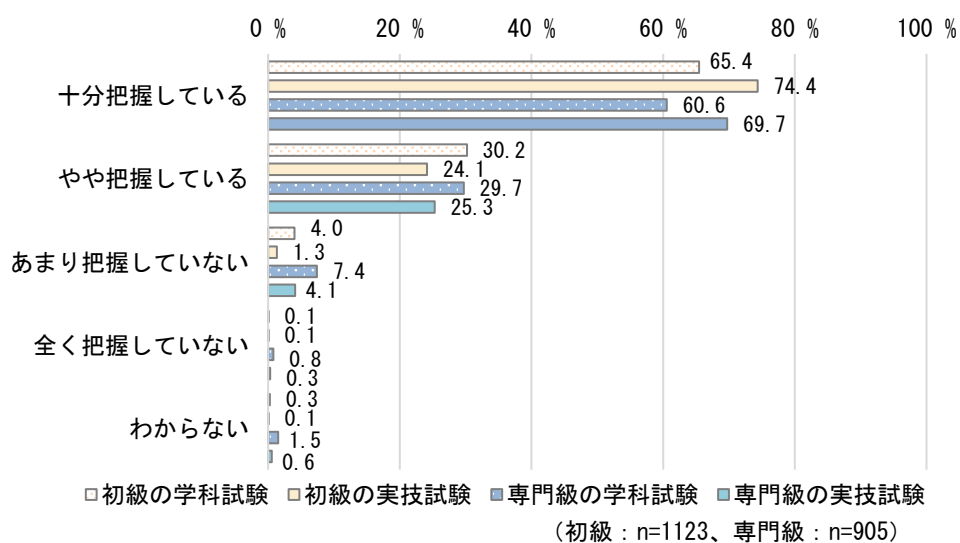
## 6. 技能実習生に対する評価試験に向けた対応の取組

### (1) 技能実習生が受検する介護技能実習評価試験の試験課題内容の把握状況

技能実習生が受検する介護技能実習評価試験が、どのようなことを確認する試験なのか、試験課題内容について、「十分把握している」と「やや把握している」を合わせて「把握している」と回答した割合が最も高いのは初級実技試験で98.5%、最も低いのは専門級学科試験で90.3%であった。

初級・専門級のいずれの試験内容においても、回答施設・事業所の9割以上で、把握をしているとの回答であり、移転すべき技能についての確認方法について、把握していると読み取れる。

図表 22 介護技能実習評価試験の試験課題内容の把握状況（単数回答）

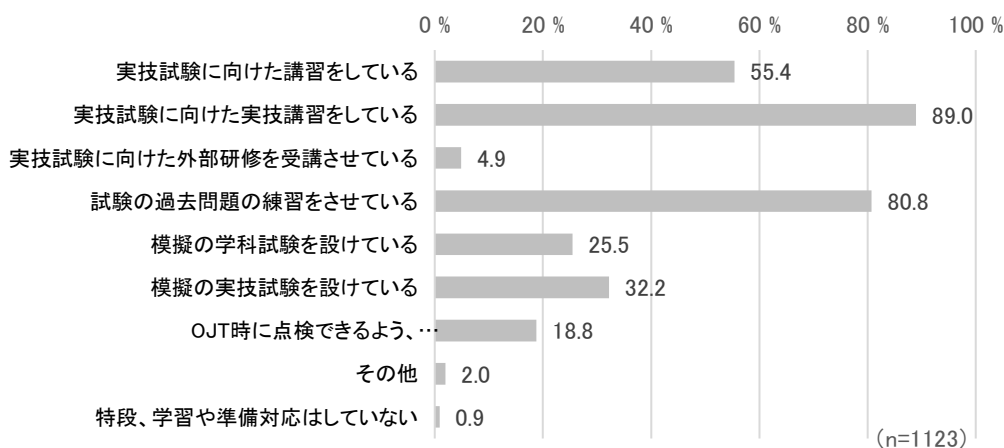


介護技能実習評価試験の 試験課題内容の把握状況	初級の学科試験		初級の実技試験		専門級の学科試験		専門級の実技試験	
	n	%	n	%	n	%	n	%
十分把握している	735	65.4	835	74.4	548	60.6	631	69.7
やや把握している	339	30.2	271	24.1	269	29.7	229	25.3
あまり把握していない	45	4.0	15	1.3	67	7.4	37	4.1
全く把握していない	1	0.1	1	0.1	7	0.8	3	0.3
わからない	3	0.3	1	0.1	14	1.5	5	0.6
無回答	10		10		228		228	
全体	1123	100.0	1123	100.0	905	100.0	905	100.0

## (2) 介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況

介護技能実習評価試験に向けて、どのように学習や準備をしているかについて、「実技試験に向けた実技講習をしている」が最も多く 89.0%、次いで「試験の過去問題の練習をさせている」は 80.8%、「実技試験に向けた講習をしている」は 55.4%であった。「特段、学習や準備対応はしていない」と回答したのは 0.9%であり、大半の実習実施者（事業所・施設）では、技能実習生に対して何らかの試験準備を行っていることが読み取れる。

図表 23 介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況（複数回答）



介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況	n	%
実技試験に向けた講習をしている	622	55.4
実技試験に向けた実技講習をしている	999	89.0
実技試験に向けた外部研修を受講させている	55	4.9
試験の過去問題の練習をさせている	907	80.8
模擬の学科試験を設けている	286	25.5
模擬の実技試験を設けている	362	32.2
OJT時に点検できるよう、チェックシートを設けている	211	18.8
その他	22	2.0
特段、学習や準備対応はしていない	10	0.9
無回答	10	
全体	1123	100.0

(\*その他 (抜粋))

### 【教材等】

- ・YouTube 等を利用し、試験勉強を進めた
- ・実技試験練習を録画し、それを繰り返し視聴している
- ・試験の過去問以外の問題を作成し練習させている
- ・独自に教材を作り勉強している

### 【業務での学習】

- ・日頃から業務中に筆記試験や実技試験に必要な注意すべき事を伝えている
- ・就業中に実技試験の予行練習を繰り返す
- ・PT などにも協力を依頼し、車椅子移乗などの実技に関する練習も取り入れている

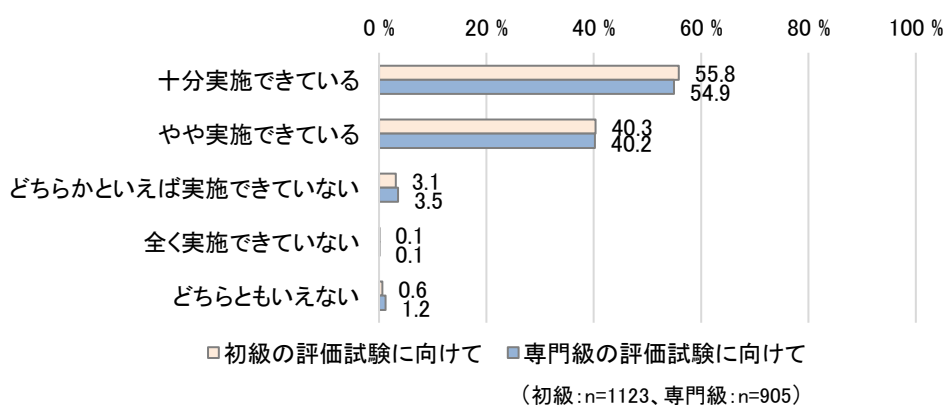
【講習・研修・勉強会】

- ・事業所内で行われる介護の研修に参加してもらう
- ・法人内で実習時間内に日本語勉強教室を5～7回／月で実施してきた
- ・院内の他部署で学科の勉強をしている
- ・本社マネジメント職員のサポートで一緒に取り組みを行った
- ・監理団体職員による勉強会を行ってもらった

(3) 介護技能評価試験前までに実習内容を全て実施できているか

「技能実習実施計画」や「介護職種 技能実習評価試験の試験科目及びその範囲並びにその細目」の実習内容を介護技能評価試験前までに全て実施できているか否かについて、初級・専門級ともに「十分実施できている」と「やや実施できている」を合わせて95%以上が実施できているという結果であった。

図表 24 介護技能評価試験前までに実習内容を全て実施できているか（単数回答）



介護技能評価試験前までの 実習内容の実施状況	初級の評価試験に 向けて		専門級の評価試験に 向けて	
	n	%	n	%
十分実施できている	627	55.8	497	54.9
やや実施できている	453	40.3	364	40.2
どちらかといえば実施できていない	35	3.1	32	3.5
全く実施できていない	1	0.1	1	0.1
どちらともいえない	7	0.6	11	1.2
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

#### (4) 介護技能実習評価試験で問われているケア内容や介護行為の根拠について技能実習生の理解を促すのが難しい事項

介護技能実習評価試験で問われているケア内容や介護行為の根拠について、技能実習生の理解を促すのが難しい事項として、技能実習生側の視点で、「理解を得ることが難しい事項」と指導者側の視点として「指導自体が難しい事項」に関する回答に大別された。下記に一部抜粋を示す。

##### 技能実習生の理解を促すのが難しい事項（技能実習生側の視点）

	回答 抜粋
介護技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 清拭の拭き方の根拠</li> <li>・ 入浴時の湯温と室温の差について（ヒートショック）</li> <li>・ 排泄介助やオムツ交換、入浴介助など羞恥心に係る事</li> <li>・ 移乗時の立ち上がりを力で介助してしまう事がある。</li> <li>・ 体位変換時、腰をまわしてする動作。実習生に力がなく、腰を回すことが出来なかった。</li> <li>・ 車椅子の移乗前の車椅子の安全確認。使用する前に毎回確認が必要であることへの理解が難しい。</li> </ul>
説明と同意、声かけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ケアの前に日本語で声掛けをし同意を得ること。</li> <li>・ 動作の都度声掛けすることに理解が乏しいケースが見受けられる</li> <li>・ 声かけ、介助全般において、スピードを重視する。早く終わることが正しいとして、介助を作業と捉えていることがある。</li> </ul>
自立支援の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ご利用者に来ることは行ってもらうような声掛けをすること。出来ることを見守り、体調に合わせた介助を行うこと。</li> <li>・ 介助をどんどん進めてしまう為、障害を持つ利用者様の特性を理解し、相手の動きを待ったり出来るところはやって頂く等の支援や介助が理解しにくい様子でした。</li> </ul>
認知症の方への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症の理解。拒否のある利用者への声掛け。</li> </ul>
福祉用具・機器	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学科試験に出てくる福祉用具が理解できないことがある。</li> <li>・ 使用したことのない介護用品の理解</li> </ul>
感染症対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 感染症で何を気を付けなければならないか教えてはいるが、実際に現場でいざ対応するとなると違う事をしてしまう。</li> <li>・ 感染症対策についてリスクに対しての危機感が薄い。</li> </ul>
記録	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 記録をする部分が記載内容が不十分であることや適切な文言でないことなどが多かった。記録をする際の指導に苦戦してしまった</li> </ul>
日本語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言葉の壁で、十分に理解出来ない時がある。</li> <li>・ 利用者に対して、声掛けを行えているが伝わっていないことや返答に対して理解できていないことがある。</li> </ul>

## 指導自体が難しい事項（指導者側の視点）

	回答
介護技術の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声掛けや報告・連絡・相談の徹底をする必要性を伝えるのが難しかった</li> <li>・自立に向かった介護や個別の残存能力を生かす介護方法を教える場合</li> <li>・手技は学習されるが、意義や目的等が後回し、かつ理解してもらるのが難しい。伝えるのも難しい。個別ケア、自立支援の考え方と考え方通りのケアが難しい。</li> <li>・体調の確認など声かけ全般で想定外の返答があった場合、その対処に関する指導が難しい。</li> </ul>
（日本語を用いた）技術指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護では、入居者の微妙な観察が言葉で伝わりにくいことが課題。</li> <li>・安楽な姿勢の作り方やボディメカニクスについての説明。</li> <li>・移乗、移動時の足の位置や重心移動の説明が難しく、伝わりづらい。</li> <li>・根拠を説明する際に専門用語、例えば仰臥位や健側などの意味の説明から行わないと正しい手順でのケアができないと感じた。</li> <li>・専門用語（特に漢字だけの熟語のもの）の理解。例えば、身体拘束（「拘束」の意味）。</li> <li>・感染対策、判断など理由や内容を日本語で説明するのが難しい。</li> <li>・日本語のニュアンスで相手への伝わり方が変わる。（方言等の理解）排泄介助や食事介助、入浴介助等においても指示を伝える際に、指導者が伝えたいことが、あまり伝わっていない。</li> </ul>
状況の変化に応じた対応・事故発生防止の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事故防止・安全対策についてはその時の状況により対応が異なるため、具体的に指導することが難しいことがある</li> <li>・普段実践することの少ない嘔吐や急変時の対応は、説明だけでは難しい。</li> </ul>
認知症介護の場面での指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・重い認知症の方が多いため、説明や同意、選択等の必要性の理解を促すことは難しい。</li> </ul>
記録の指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護記録やアクシデント・インシデント報告書の作成や言葉の使い方についての指導</li> </ul>
理解度合いの把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容や行為自体ではなく、日本語能力の有る無しでこちらからの伝達や指導の理解が難しいと感じる。本人達は分かっているなくても「はい」と返事をする。</li> <li>・どこまで深く理解できているのか、日本語での確認が難しく、表情や声のトーンで判断するしかない。</li> </ul>
指導方法・介護者のケアのばらつき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者に応じて介助方法や禁忌事項があるにもかかわらず、技能実習生以外が別のやり方をすると、それに倣ってしまうことがある。</li> </ul>
試験評価を意識した指導：都度の声かけの指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・想定した動きの試験内容項目に対しての伺い（最初の声掛け）。一連の流れや動きで、確認していることが項目毎の評価であることとその説明。</li> <li>・通常は一連の流れで行っているケアを区切って行うこと。その都度利用者に体調を確認しなければならないこと。</li> <li>・普段の介助は簡略している所があるので試験に必要な部分を再度説明する際に理解するのに時間を要する</li> <li>・コロナ対応真っ最中であったため、丁寧にご利用者に声かけ（説明と同意、痛みや体調変化の有無）をする余裕がなく、普段の声かけと試験の練習とに違いが生じた。</li> </ul>



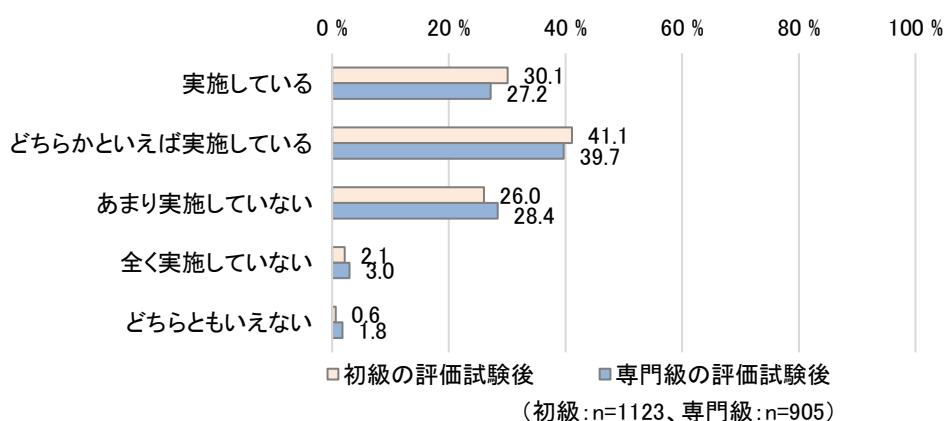
	回答
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・根拠は難しくないが、普段忙しくて衣類を選択してもらう場面や、途中で声をかけるような場面がないのになぜ試験で問われているのか、と聞かれたことがあった。</li> </ul>
<b>試験評価を 意識した指 導：意向確 認の指導</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意思疎通が難しいご利用者が多いため、どうしても意思疎通ができるご利用者を選ぶと、自立度が高いご利用者になってしまい、普段の介護と試験項目とのギャップが生じてしまう</li> </ul>
<b>試験評価を 意識した指 導：業務で 用いていな い、器具の 説明・介護 技術</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通常使わない器具の説明を絵などで理解を深めるようにしているが、難しい部分もある</li> </ul>

### (5) 介護技能実習評価試験後の試験のフィードバックや技術の修正等の実施状況

技能実習生に対して試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等を実施しているか否かについて、「実施している」と「どちらかといえば実施している」を合わせると、初級は71.2%、専門級は66.9%が「実施している」と回答した。約7割の事業所・施設では、介護技能実習評価試験後に、試験のフィードバックや技術の修正等を行っていることが示された。

実習制度として、習得状況の確認として試験が組み込まれていることで、指導の現場での実習生へのフィードバックの機会に繋がっていることがうかがえる。

図表 25 介護技能実習評価試験後の試験のフィードバックや技術の修正等の実施状況（単数回答）

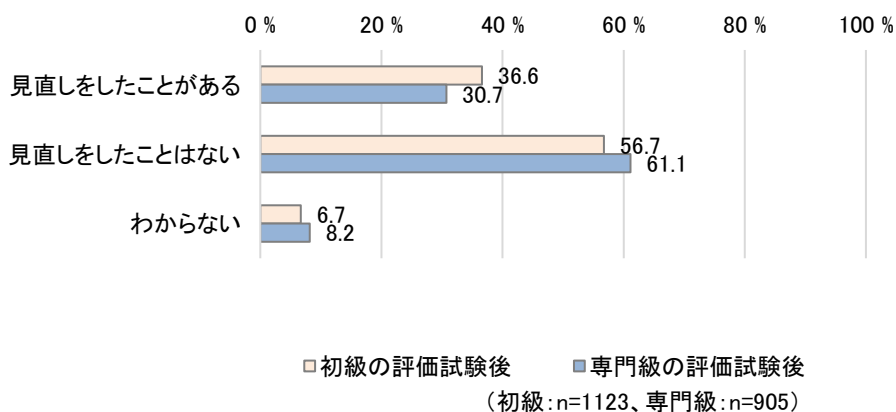


試験のフィードバックや技術の修正等の実施状況	初級の評価試験後		専門級の評価試験後	
	n	%	n	%
実施している	338	30.1	246	27.2
どちらかといえば実施している	462	41.1	359	39.7
あまり実施していない	292	26.0	257	28.4
全く実施していない	24	2.1	27	3.0
どちらともいえない	7	0.6	16	1.8
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

## (6) 介護技能実習評価試験を受けての日ごろの指導方法の見直し

介護技能実習評価試験（講習、模擬試験、試験結果等）を受けて、日ごろの指導方法の見直しを行ったことがあるか否かについて、「見直しをしたことがある」のは初級 36.6%、専門級 30.7%と、3割程度であった。半数以上の事業所・施設（初級評価試験：56.7%、専門級評価試験：61.1%）においては、評価試験を契機とした指導方法の見直しまでには至っていない。

図表 26 介護技能実習評価試験を受けての日ごろの指導方法の見直し（単数回答）



介護技能実習評価試験を受けて、 指導方法の見直しを行った経験	初級の評価試験後		専門級の評価試験後	
	n	%	n	%
見直しをしたことがある	411	36.6	278	30.7
見直しをしたことはない	637	56.7	553	61.1
わからない	75	6.7	74	8.2
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

## (7) 初級の評価試験後に「見直しをしたことがある」場合の見直し内容（自由回答）

初級の評価試験後に、具体的にどのような指導方法の見直しを行ったのか、以下に回答例を示す。  
(抜粋)

### 【介護技術】

- ・ 1つのケアごとに必ず利用者の表情や発言にも注目するように指導するよう統一
- ・ 一つ一つの動作に対しての声かけを再度指導した
- ・ ケア行為を行う前に説明・同意後に行動する
- ・ プライバシーについておろそかになっていたと感じたので、みんなで話をして改善するようにした
- ・ 流れ作業になりがちな介護の仕方を、入居者主体にしていくこと
- ・ 自立支援と認知症緩和ケアの意義を十分理解してケアに当たるように話し合っている
- ・ 食事や排泄など基本的な介助方法 ・ 食事形態やアレルギー表示の仕方
- ・ 福祉用具や使用器具の安全確認が不十分な時があるため、その部分を更に説明をするように対応した
- ・ スライディングシートの活用について再度見直し、活用を促した
- ・ リハ専門職にボディメカニクスの勉強会を依頼し、実施した

### 【教材】

- ・ 分かりやすいリーフレット（写真や図があるもの）を使用したり実際に体験してもらう機会を作るようにした
- ・ 初級の評価試験に向けて、入職後、独自のマニュアルを作成し渡している（日本語と英語で解りやすく作成）
- ・ 介護技能チェックリストを活用している

### 【指導者側の介助方法】

- ・ 職員間での介助方法や根拠についてのズレが生じており、実習生が混乱していた場面があった為、指導側の介護指導についての見直しを行った
- ・ 施設内ではあたりまえになっていることが 試験では NG になることがあり、施設全体で見直すきっかけとなった
- ・ 実習生が関わる入居者様の介護内容だけでなく、手順等も職員間で統一し指導するようにした

### 【指導方法】

- ・ 誤りがあった時に指導する側がすぐに手を出して修正するのではなく、どこに誤りがあるのか自分で考えることを促す言葉がけをする
- ・ 技術の部分よりも指導員の指示の言葉の選択を気を付ける。同じ指示内容でも、これくらいかみ砕かないと理解して頂けない等
- ・ 介護技術は、実際に見せて指導する機会を増やした
- ・ 口頭だけでなくジェスチャーも用いる指導を行うようにして、内容の意味の理解を深めた
- ・ 指導者と実習生がペアを組んでケアをおこなう際の立ち位置や、呼吸の合わせ方など
- ・ 研修方法の見直し
- ・ マンツーマンでの研修を行い試験に臨めるように変更した
- ・ 試験に向けての演習時間を増やした

### 【日本語・専門用語】

- ・ 実習生によって日本語の習得度合いが異なるため、日本語の細かいニュアンスを伝える際には翻訳アプリを活用しながら理解できるように指導に取り入れた
- ・ 実際介護現場で、専門用語を使いながらあまりできていなかったため、試験後からは、極力専門用語を覚えて頂けるよう介助にあたった
- ・ 専門用語をなるべく多く使うようにした
- ・ 日本語能力が想定より低いことがわかったので、個別に日本語研修の機会を設けた

### 【指導者側の日本語】

- ・ 日本人が正しい日本語を使い、正しい日本語で言葉の使い方を学んでもらう。試験の時だけでなく、日常的に、試験同様に技術を意識して貰う

## (8) 専門級の評価試験後に「見直しをしたことがある」場合の見直し内容（自由回答）

専門級の評価試験後に具体的にどのような指導方法の見直しを行ったのか、以下に回答例を示す。  
(抜粋)

### 【介護技術】

- ・ 慣れてきた分、丁寧さにややかけていたので、声かけの仕方や介助方法について、もう一度基本から指導しやり方を修正した
- ・ ある程度の介護技術を習得しているが故、効率を重視することが多く感じられたため、ケア前の声掛け・利用者を主体とした介護をもう一度見直せるよう指導者側から都度声を掛けるよう徹底した
- ・ 初級で出来ていたことが専門級の時には自分のやり方になってしまっていた。その際、再度ケア方法の見直しを行った
- ・ 声かけをしているが利用者に同意を得ない間に、ついつい手が出てしまい介助を行ってしまう傾向にあったので初心の心を思い返すよう伝え続けた
- ・ 声かけの重要性を再認識し、利用者に対して説明して同意を必ず得るようにした
- ・ 誤嚥に関する理解を深めるために誤嚥性肺炎など病態が利用者に及ぼす影響を理解させ、防止の必要性を深めてもらった
- ・ 食札（食事の内容が書かれている札）についての説明
- ・ 利用者について、記憶していない細部を確認するデータ場所の把握
- ・ アレルギー等確認するシート等を伝えるようにした。職員が口頭で伝えているだけだったため
- ・ 食事介助を積極的に行ってもらいムセがあった時など対応して記録に残すように指導した
- ・ イレギュラーな対応（リスク対応・救急対応）など普段起きないようなことについての確認など行いました
- ・ 嘔吐物の処理方法で、必要物品の保管場所の確認や手順を見直し周知した
- ・ 車いすの移動方法 事故防止と安全対策の理解について
- ・ 病棟の特徴から、ADLが低い患者が多く、普段から車椅子移乗技術などの指導が少ない為、リハビリや検査などでの車椅子移乗時は指導の観点から、一緒に行い、実際にその際に指導に入るようにしている
- ・ 感染対策、予防についての手順を再度、確認した
- ・ 感染症対策のガウンの着用方法等、見直し、練習した
- ・ 自分でより良い最善な判断をするということについて
- ・ 個々の利用者に合わせて介護技術と試験に求められる介護技術が異なることを伝え、教えている

### 【教材】

- ・ 事故対応や感染症対応について施設のマニュアルを分かり易く変更した
- ・ 専門級の評価試験に向けて、独自のマニュアルを作成し渡している（日本語と英語で解りやすく作成）

### 【指導方法】

- ・ 実施した介護の根拠や利用者の特性について、できるだけ言語化（日本語）できるよう、より言葉でのコミュニケーションを増やした
- ・ 1対1での介助を行う際は、常に利用者の顔色や気分、体調を常に観察しながら、後に報告ができるようになるよう見直しを行った
- ・ シミュレーションを取り入れたり、実技の部分は業務中に再指導を行った
- ・ 記録の内容が不明瞭な部分があり、どういった内容を記入にしているのか本人と面談しながら記録内容を書き方を細かく見直し
- ・ 指導者間のコミュニケーションの充実

### 【職員のケアの見直し】

- ・ 食事やおやつの配膳時に食事カードがあるのに使っていないことがあった。指導する日本人が使っていないことがあった為施設で再度見直しをし、必ず確認して配膳するようにした
- ・ 施設内ではあたりまえになっていることが 試験では NG になることがあり、施設全体で見直すきっかけとなった
- ・ 再度基本を見つめ直してケアを行うように実習生以外にも指導を行う

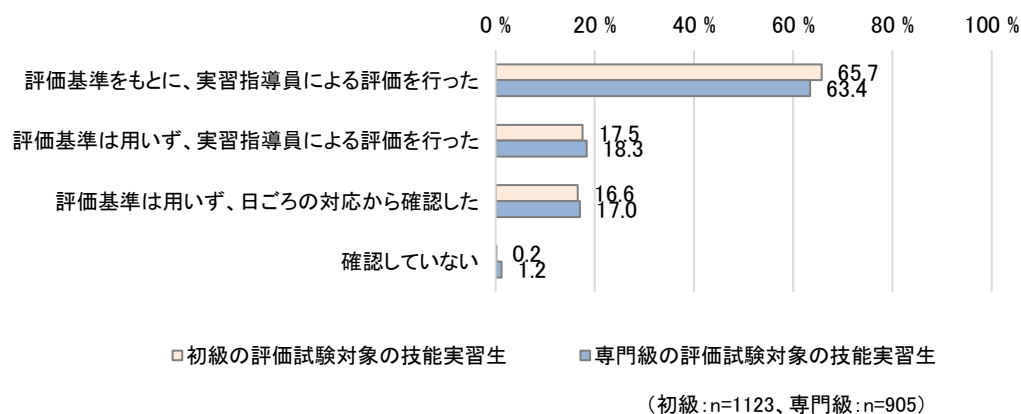
### 【日本語】

- ・ 声かけが方言になってしまっているので、標準語の声掛けの仕方を指導した
- ・ 方言で覚えてしまっている部分があるので、試験課題で使われる丁寧な日本語を覚えてもらうよう見直ししました
- ・ 漢字圏の技能実習生とそれ以外の方で方法を変更した
- ・ 日本語力について、過信せずに丁寧に説明を行う

### (9) 技能実習評価試験の受検に備えた技能実習生の現状スキルの確認方法

技能実習評価試験の受検に備え、技能実習生の現状スキルについて、どのように確認しているかについては、評価基準を用いて評価を行っている施設・事業所は、6割程度であった（初級：65.7%、専門級：63.4%）。4割程度の事業所・施設においては、評価基準までは設けずに実習指導がなされているものと読み取れる。

図表 27 技能実習評価試験の受検に備えた技能実習生の現状スキルの確認方法（単数回答）

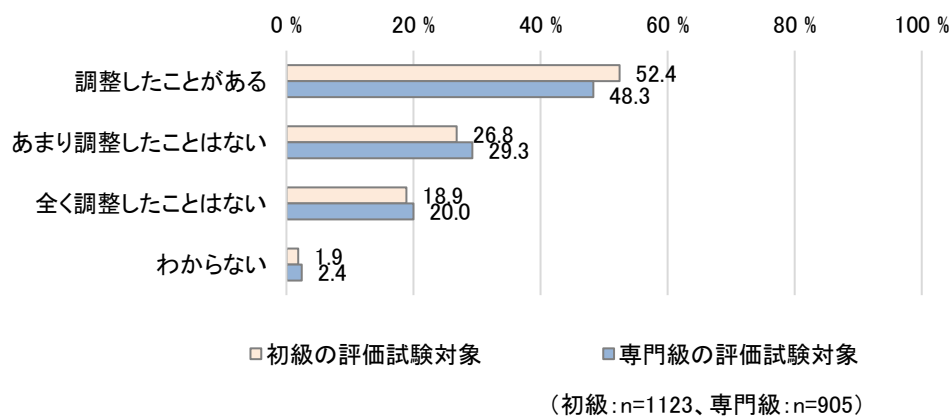


技能実習生の現状スキルの確認方法	初級の評価試験対象の技能実習生		専門級の評価試験対象の技能実習生	
	n	%	n	%
評価基準をもとに、実習指導員による評価を行った	738	65.7	574	63.4
評価基準は用いず、実習指導員による評価を行った	197	17.5	166	18.3
評価基準は用いず、日ごろの対応から確認した	186	16.6	154	17.0
確認していない	2	0.2	11	1.2
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

### (10) 技能修得に時間を要している技能実習生に対する受検日程の調整経験

技能修得に時間を要している技能実習生に対して、できるだけ実習時間を確保できるように、受検日程を調整したことがあるか否かについて、できるだけ実習時間を確保できるよう、受検日程を「調整したことがある」と回答したのは、初級52.4%、専門級48.3%で、半数近くの事業所・施設では、実習生の学習時間確保のための受検タイミングの調整をしたことがあるといえる。

図表 28 技能修得に時間を要している技能実習生に対する受検日程の調整経験（単数回答）



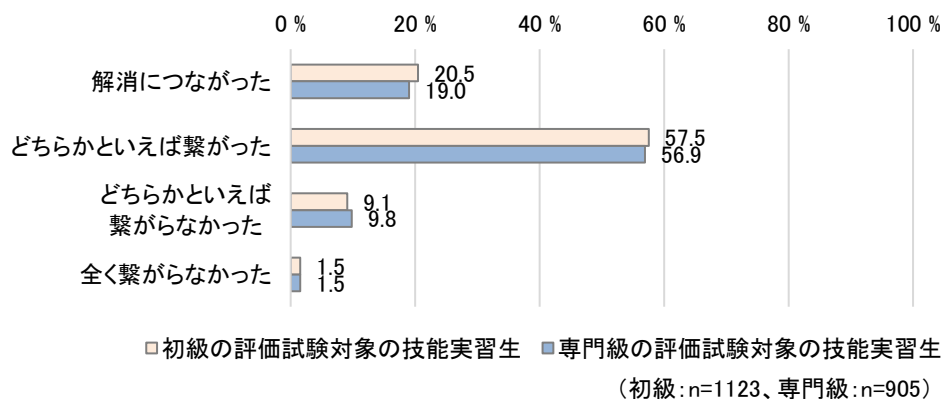
技能修得に時間を要している 技能実習生に対する受検日程の調整経験	初級の評価試験対象		専門級の評価試験対象	
	n	%	n	%
調整したことがある	589	52.4	437	48.3
あまり調整したことはない	301	26.8	265	29.3
全く調整したことはない	212	18.9	181	20.0
わからない	21	1.9	22	2.4
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0



(11) 介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか

介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は、技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか否かについては、「解消に繋がった」、「どちらかと言えば解消に繋がった」を合わせると、初級・専門級ともに7割以上の回答者（初級：78.0%、専門級：75.9%）が、試験に向けた取組や受検の機会を持つことは、学習進捗差の解消に繋がっている、と答えている。

図表 29 介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか（単数回答）



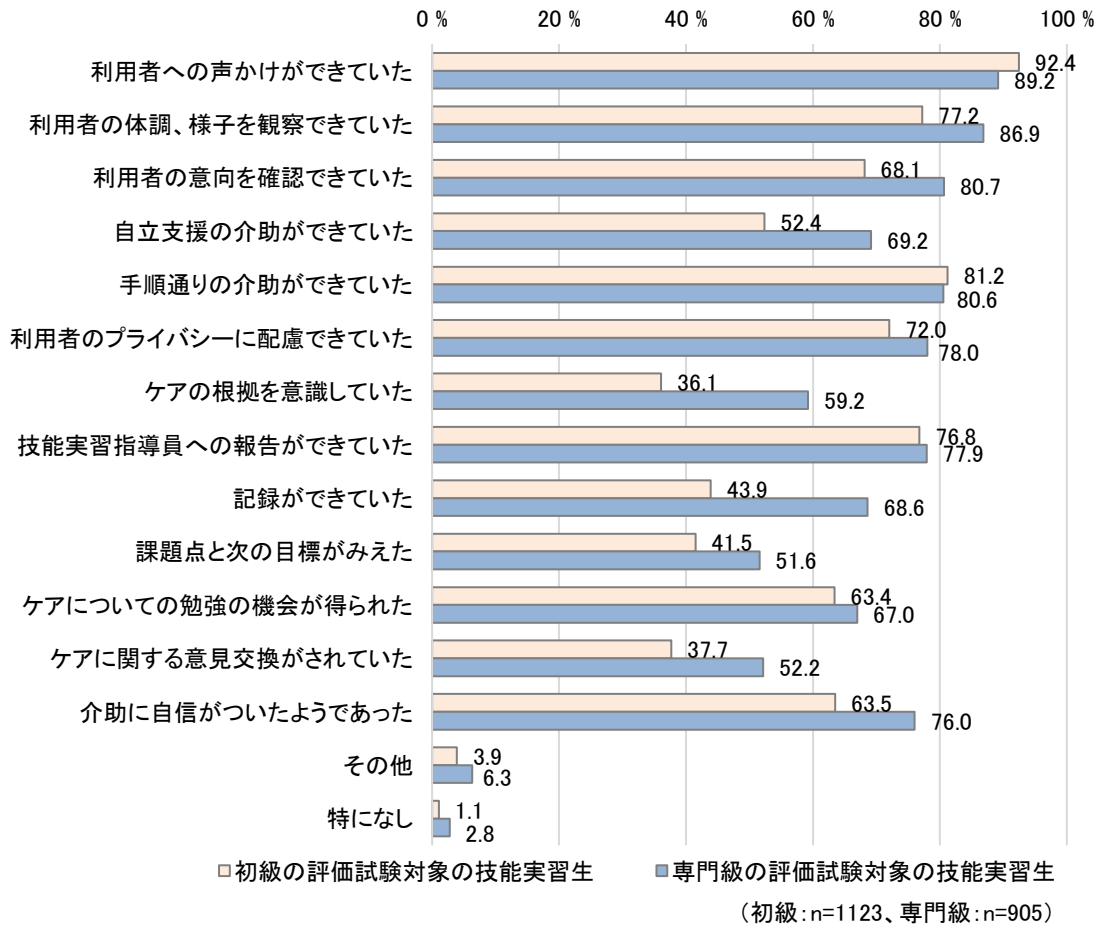
介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか	初級の評価試験対象の技能実習生について		専門級の評価試験対象の技能実習生について	
	n	%	n	%
解消につながった	230	20.5	172	19.0
どちらかといえば繋がった	646	57.5	515	56.9
どちらかといえば繋がらなかった	102	9.1	89	9.8
全く繋がらなかった	17	1.5	14	1.5
どちらともいえない	128	11.4	115	12.7
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

## (12) 介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて実習生の業務でみられた姿勢

介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて、実習生の業務でみられた姿勢については、介護技能、業務姿勢に関する項目について、初級よりも専門級のほうが高い傾向が示された（「利用者の体調、様子を観察できていた」（9.7ポイント差）、「利用者の意向を確認できていた」（12.6ポイント差）、「自立支援の介助ができていた」（16.8ポイント差）、「利用者のプライバシーに配慮できていた」（6.0ポイント差）、「ケアの根拠を意識していた」（23.1ポイント差）、「技能実習指導員への報告ができていた」（1.1ポイント差）、「記録ができていた」（24.7ポイント差）、「課題点と次への目標がみえた」（10.1ポイント差）、「ケアについての勉強の機会が得られた」（3.6ポイント差）、「ケアに関する意見交換がされていた」（14.5ポイント差）、「介助に自信がついたようであった」（12.5ポイント差））。

特に初級と専門級の差が大きい項目として、「記録ができていた」（24.7ポイント差）、「ケアの根拠を意識していた」（23.1ポイント差）、「自立支援の介助ができていた」（16.8ポイント差）等があげられる。また、「ケアに関する意見交換がされていた」（14.5ポイント差）、「介助に自信がついたようであった」（12.5ポイント差）など、介護業務に関わる姿勢についての差異もみられた。「利用者への声かけができていた」と「手順通りの介助ができていた」については、僅かではあるが初級の方が専門級を上回る回答となった。級が進むと、手順の遵守だけでなく、介護の基本理念を踏まえた対応や状態観察、配慮がよりできるようになり、技術獲得やケアに対する積極的な意見交換や自信につながっている、と読み取れ、評価試験が組み込まれた介護技能実習制度を通じて、介護技能の修得がはかられているといえる。

図表 30 介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて技能実習生の業務でみられた姿勢（複数回答）

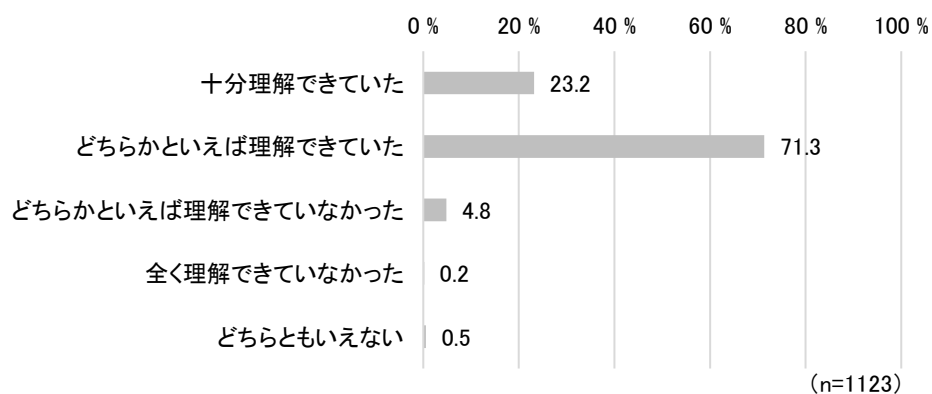


介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて技能実習生の業務でみられた姿勢	初級の評価試験を受検した（1年経過）の技能実習生		専門級の評価試験を受検した（3年経過）の技能実習生	
	n	%	n	%
利用者への声かけができていた	1038	92.4	807	89.2
利用者の体調、様子を観察できていた	867	77.2	786	86.9
利用者の意向を確認できていた	765	68.1	730	80.7
自立支援の介助ができていた	588	52.4	626	69.2
手順通りの介助ができていた	912	81.2	729	80.6
利用者のプライバシーに配慮できていた	809	72.0	706	78.0
ケアの根拠を意識していた	405	36.1	536	59.2
技能実習指導員への報告ができていた	862	76.8	705	77.9
記録ができていた	493	43.9	621	68.6
課題点と次の目標がみえた	466	41.5	467	51.6
ケアについての勉強の機会が得られた	712	63.4	606	67.0
ケアに関する意見交換がされていた	423	37.7	472	52.2
介助に自信がついたようであった	713	63.5	688	76.0
その他	44	3.9	57	6.3
特になし	12	1.1	25	2.8
無回答	10		228	
全体	1123	100.0	905	100.0

### (13) 学科試験問題や実技課題の日本語の理解度

技能評価試験に関する日本語の理解については、「十分理解できていた」、「どちらかといえば理解できていた」を合わせると、94.5%が「理解できていた」との回答であり、実習指導員からみて、技能実習生の試験問題で用いている日本語は、理解できているとの評価と読み取れる。

図表 31 学科試験問題や実技課題の日本語の理解度（単数回答）

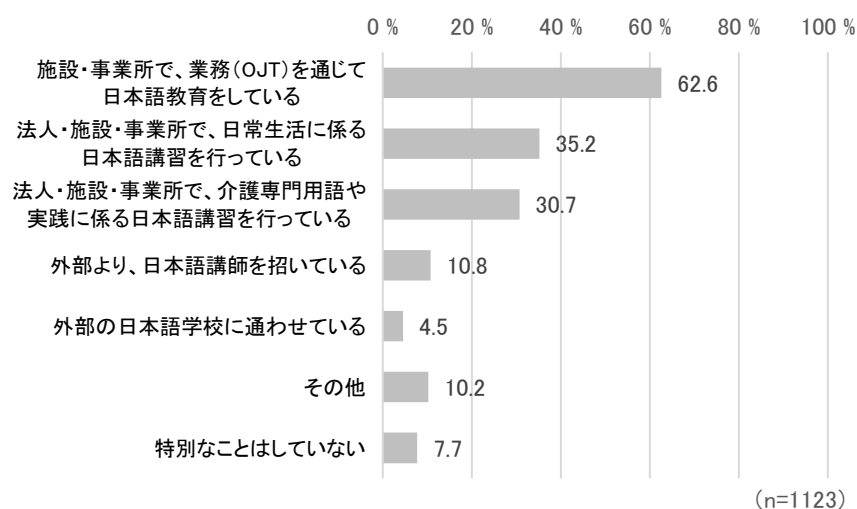


学科試験問題や実技課題の日本語の理解度	n	%
十分理解できていた	260	23.2
どちらかといえば理解できていた	801	71.3
どちらかといえば理解できていなかった	54	4.8
全く理解できていなかった	2	0.2
どちらともいえない	6	0.5
無回答	10	
全体	1123	100.0

## (14) 技能実習生への日本語教育

技能評価試験に向けた対応において、技能実習生への日本語教育として、どのような対応をしているかについて、「施設・事業所で、業務（OJT）を通じて日本語教育をしている」が最も多く62.6%、次いで「法人・施設・事業所で、日常生活に係る日本語講習を行っている」は35.2%、「法人・施設・事業所で、介護専門用語や実践に係る日本語講習を行っている」は30.7%であった。「特別なことはしていない」は7.7%であった。約9割の施設・事業所では、評価試験に向けての日本語学習・対応を行っている。

図表 32 技能実習生への日本語教育（複数回答）

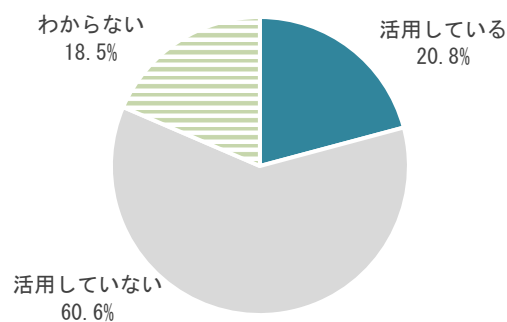


技能実習生への日本語教育	n	%
施設・事業所で、業務（OJT）を通じて日本語教育をしている	703	62.6
法人・施設・事業所で、日常生活に係る日本語講習を行っている	395	35.2
法人・施設・事業所で、介護専門用語や実践に係る日本語講習を行っている	345	30.7
外部より、日本語講師を招いている	121	10.8
外部の日本語学校に通わせている	51	4.5
その他	115	10.2
特別なことはしていない	87	7.7
無回答	10	
全体	1123	100.0

### (15) 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の活用状況

介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を、他の介護人材の育成（外国人人材/日本人職員等）に「活用している」は20.8%、「活用していない」は60.6%であり、技能実習制度のOJTの仕方や教材などを、他の介護職員にまで展開したり応用したりしているところは、2割程度に限られる。

図表 33 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の活用状況（単数回答）



(n=1123)

介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の活用状況	n	%
活用している	234	20.8
活用していない	681	60.6
わからない	208	18.5
無回答	10	
全体	1123	100.0

## (16) 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の具体的活用内容(自由回答)

介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を、他の介護人材の育成（外国人人材/日本人職員等）にどのように活用しているかについて、回答例を以下に示す（抜粋）。具体的には、日本人介護職員に対しての基本への立ち返りの機会、習熟度の確認、新任職員の指導への活用、他の在留資格外国人介護人材の指導への活用や、教材としての活用、スキルの評価基準としての活用、など、OJT や Off-JT、評価の充実に向けて活用していることが示された。

### 【他の職員の指導に活用している】

- ・ 職員への OJT にも、活用している
- ・ 介護技能実習評価試験の介護項目、評価基準に基づいて、他職員を含め教育、実技講習を実施している
- ・ 評価試験内容を日本人職員にも行ってもらっている
- ・ 試験の指導を日本人職員にも行わせることで、日本人職員にも基本の大切さを再認識させることが出来た
- ・ 日本人の介護職員に、「このくらいの知識や技術が介護には求められているんだよ」という指標として活用
- ・ 評価試験を受けない人材についても、同様の指導を行っている
- ・ 現在行っている介護の根拠等、技能実習生だけでなく、その他の職員も一緒に学習している

### 【新任職員の指導に活用している】

- ・ 新任職員入職時から約 2 カ月間で行なう研修やトレーニング用の人形を使った実技訓練は技能実習生と共通したプログラムで実施している
- ・ 新卒の介護職員や未経験介護職、介護アシスタント特定技能外国人にも介護技術向上の為に情報共有している
- ・ 法人内の新人研修等で、日本人職員にも初級、専門職講習と同等の内容で研修を行っている
- ・ 新人教育に介護技術・業務内容の評価シートを作成し利用している
- ・ 新人職員に対し使用したことがある
- ・ 新人育成教育のカリキュラムにも代用しています

### 【特定技能実習生の指導に活用している】

- ・ 特定技能、留学生の介護指導に応用している
- ・ 特定技能実習生の習得度を図るために活用
- ・ 特定技能の外国人職員に対し活用
- ・ 特定技能職員への指導の参考にしている

### 【EPA 候補生の指導に活用している】

- ・ EPA 候補生に対し、実際に使用した技術等の資料を用いて指導を行った

### 【研修やマニュアルに活用している】

- ・ 研修や受入れマニュアルの更新に活用
- ・ 介護マニュアルとしての活用
- ・ 中途採用職員等へのマニュアルの見直しを行った

### 【介護ケアの基本の再確認に活用している】

- ・ テキスト「外国人技能実習生（介護職種）のためのよくわかる介護の知識と技術」を用いて、介

護の基本的な部分の理解を促している

- ・ 介助時の声掛けなど基本の大切さを再確認するため他職員にも実施してもらっている
- ・ 他の職員に対する介護ケアの基本の復習に役立っている
- ・ 筆記試験問題を職員にも出題して、基本的な考え方を振り返るために活用した
- ・ 介護の基本から初心に戻り、ケア方法を都度、見直し、他職員にも伝えている
- ・ 実技試験科目に関して他の介護職員にも共有し、介助における重要ポイントを改めて見直した

**【業務の習熟度の確認に活用している】**

- ・ 業務の習熟度をチェックする表を作成し、活用している
- ・ チェック表を用いて、業務の理解度のチェックを行っている
- ・ 新入職員指導チェックシートを技能実習生指導計画に基づいて修正した

**【評価基準として活用している】**

- ・ 評価表を作成し、日本人職員にも応用している
- ・ 評価基準の見直し、評価表等の書類の整備の検討
- ・ 習得の段階を、技能実習評価内容と照らし合わせ、評価している
- ・ 技能実習評価試験問題（実技）を用いて、新人職員のスキル習得評価に活用している

**【安全衛生業務に活用している】**

- ・ 評価試験のポイントに事故防止に繋がる場所があり、注意すべき項目を参考にしている
- ・ 吐物処理方法や手洗い、車イスの点検を研修で行った



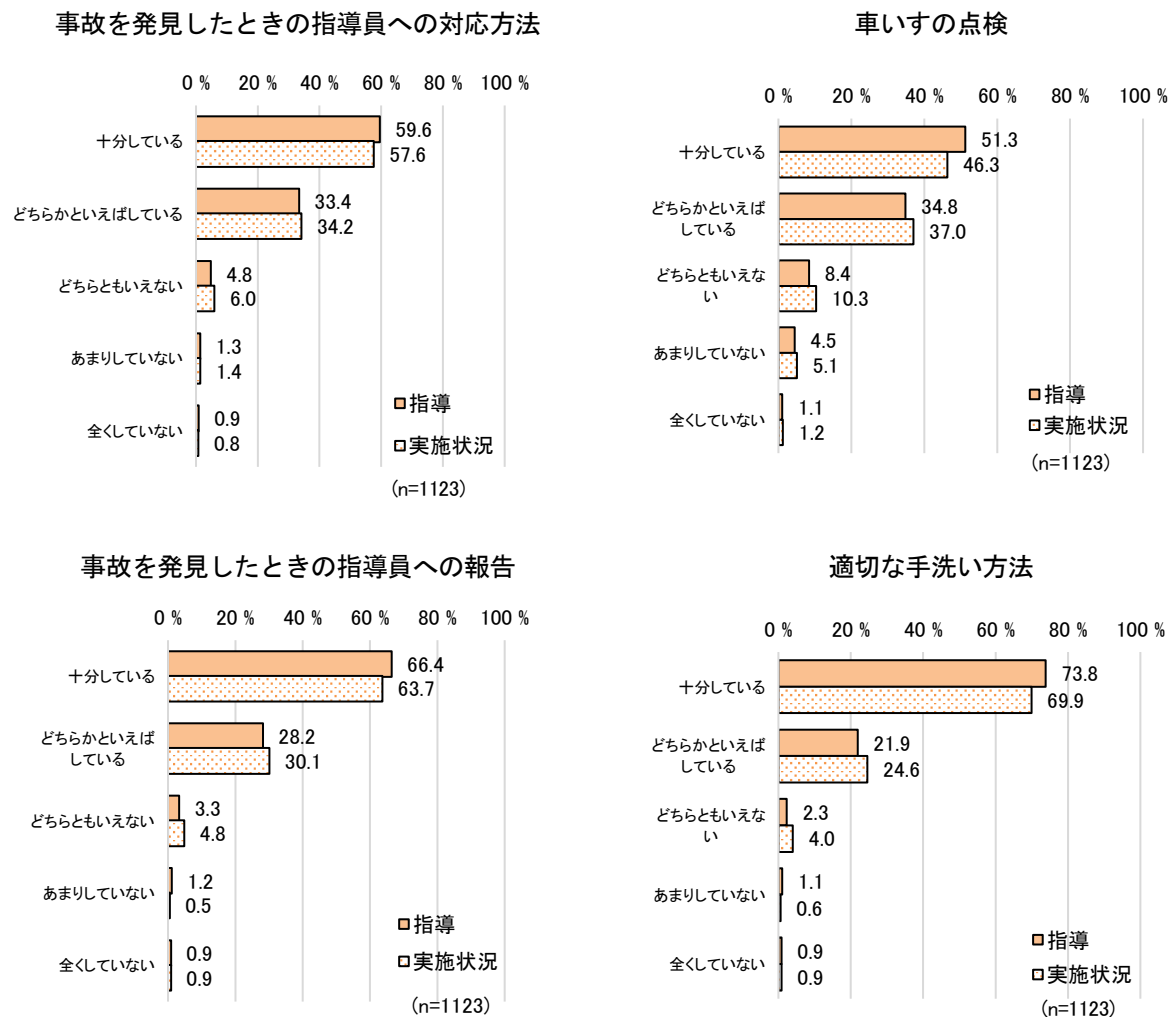
## 7. 実技試験課題について

### (1) 実技試験課題との関係：安全衛生業務の指導と対応の実態について（初級）

介護技能実習実技評価試験の課題に即して、安全衛生業務に関して、直近1年間の実習現場での実習指導員による指導状況と実習生の業務実施状況を伺ったところ、初級の指導状況（「十分指導している」と「どちらかといえば指導している」の計）と業務実施状況（「十分実施している」と「どちらかといえば実施している」の計）において、最も低かったのは、「車いすの点検方法の指導」（86.1%）と「車いすの点検の実施」（83.3%）であった。それ以外の試験課題項目に関しては、9割以上が指導も実施もできている、との回答であった。結果からは、実技試験課題に即した実習指導と、実習生による業務実施がなされており、課題と現場実態に特段の乖離はみられないものと読み取ることができる。

#### <初級>

図表 34 初級における安全衛生業務の指導と対応の実態（単数回答）

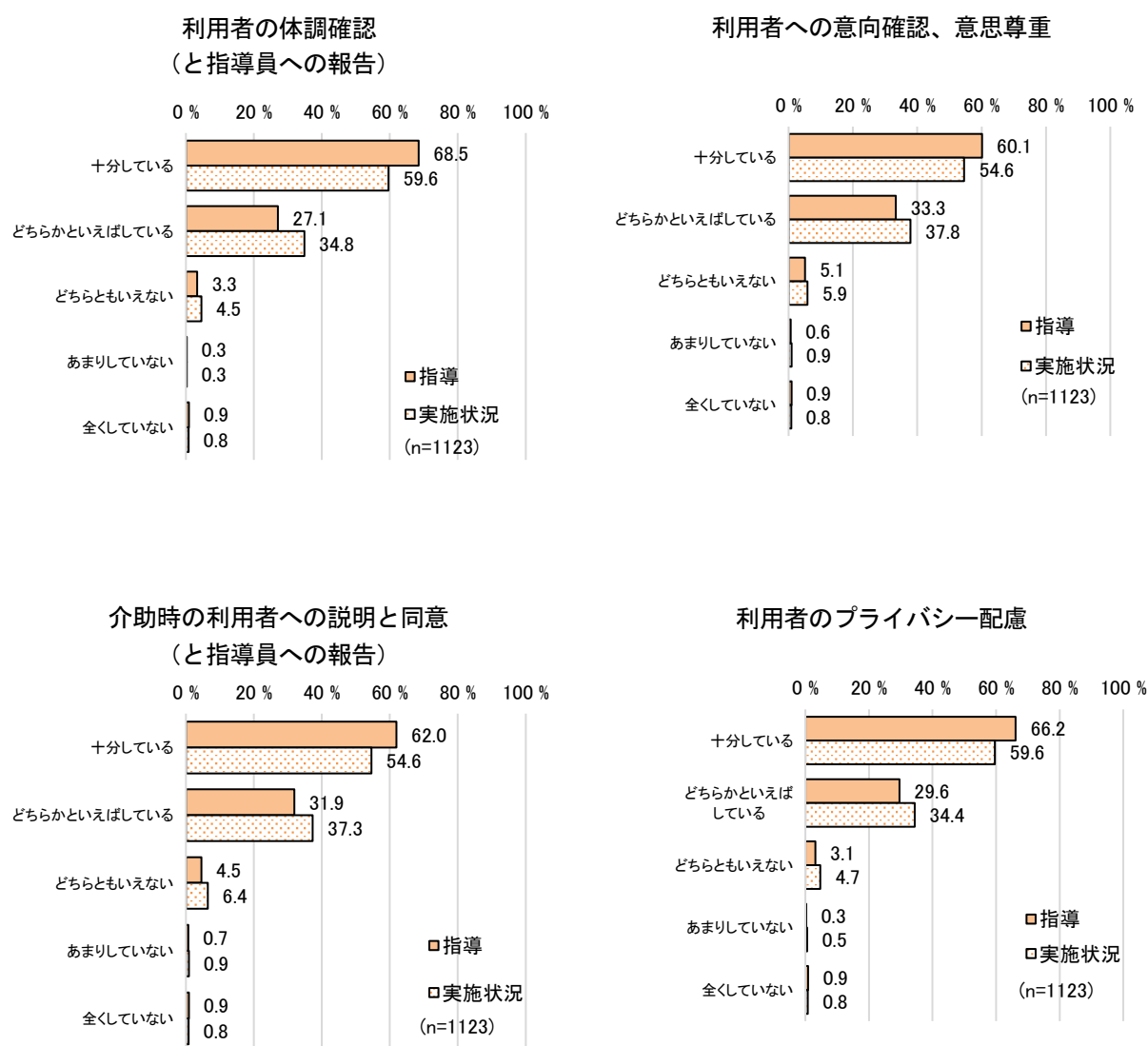


## (2) 実技試験課題との関係：身体介護業務の指導と対応の実態（初級）

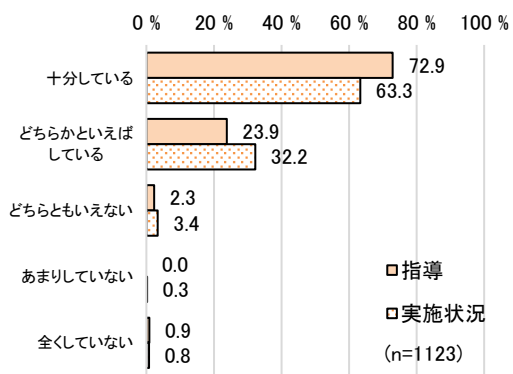
続いて、実技試験課題に即し、身体介護業務に関して、直近1年間の指導の状況と実習生による業務実態を伺ったところ、初級の指導状況（「十分指導している」と「どちらかといえば指導している」の計）と業務実施状況（「十分実施している」と「どちらかといえば実施している」の計）は、すべての課題において、9割以上が指導及び実施しているとの回答であり、試験課題項目と実習指導、実習生による業務に、特段の乖離は見られない。

### <初級>

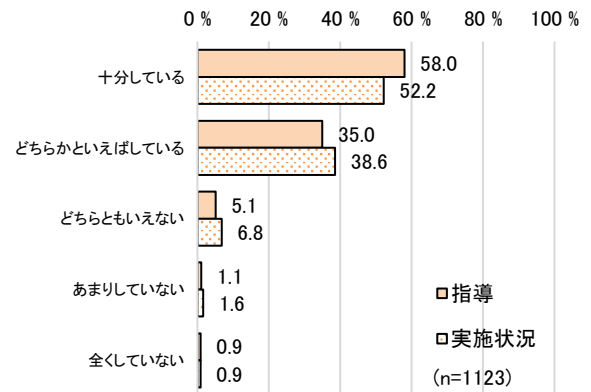
図表 35 初級における身体介護業務の指導と対応の実態（単数回答）



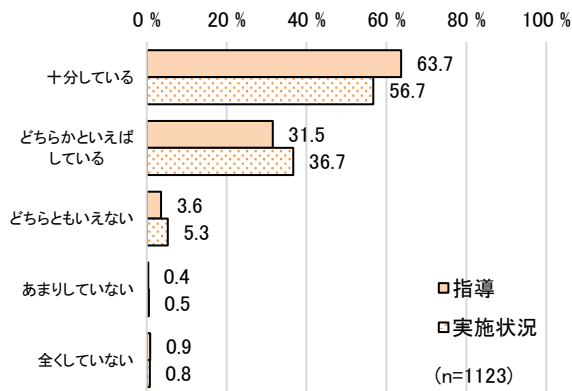
### 介助時の安全確認、安全な介助方法



### 行なった介助の指導員への報告

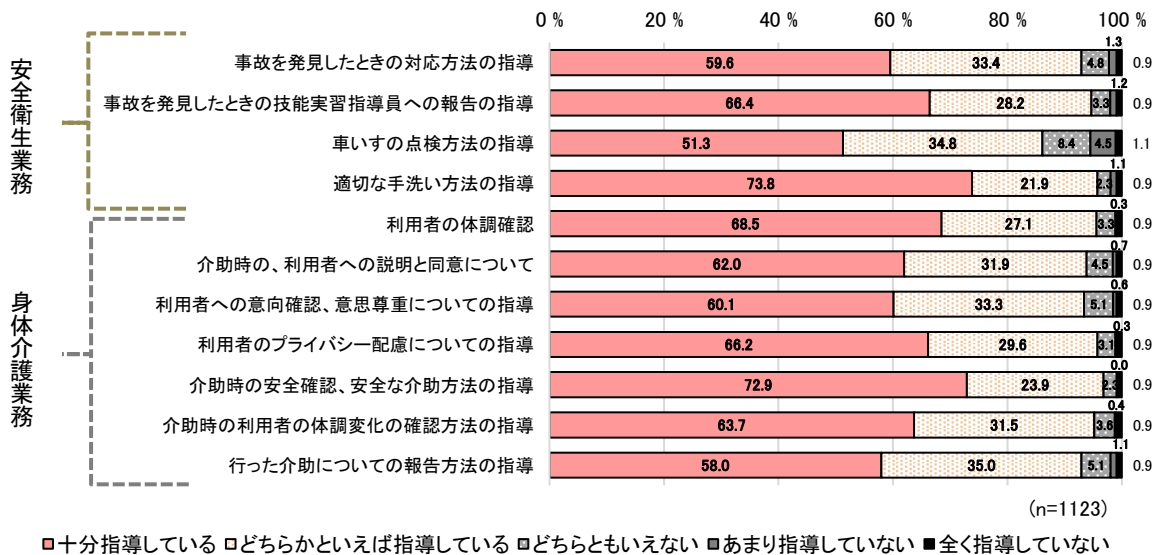


### 利用者の体調変化の確認 (と指導員への報告)



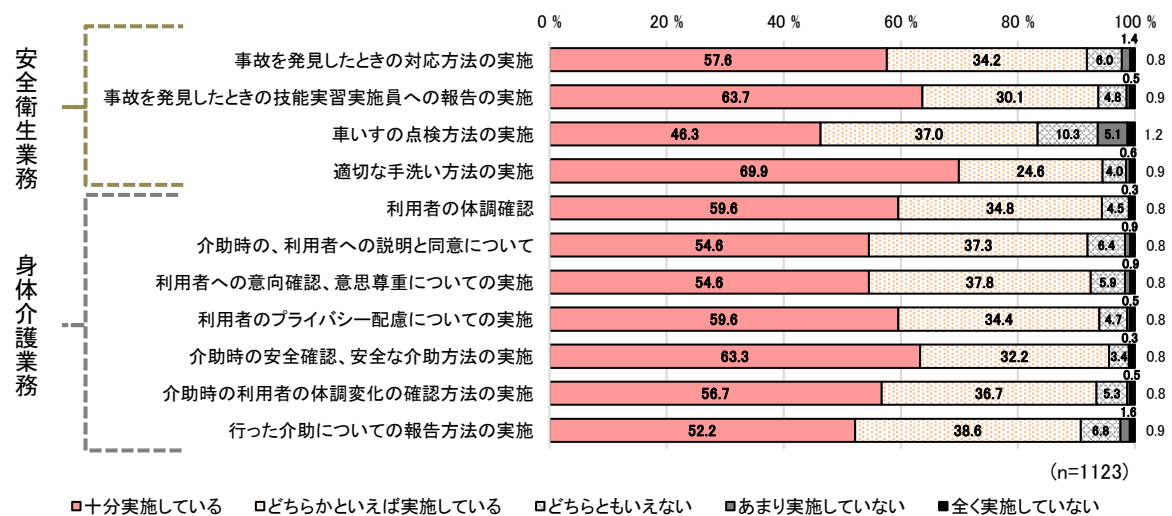
以下、初級の安全衛生業務及び身体介護業務について、指導状況と業務実施状況ごとにグラフ化した。(再掲)

図表 36 実技試験課題に関する指導状況\_安全衛生業務及び身体介護業務(初級)



■十分指導している □どちらかといえば指導している □どちらともいえない □あまり指導していない ■全く指導していない

図表 37 実技試験課題に関する実施状況\_安全衛生業務及び身体介護業務(初級)



■十分実施している □どちらかといえば実施している □どちらともいえない □あまり実施していない ■全く実施していない

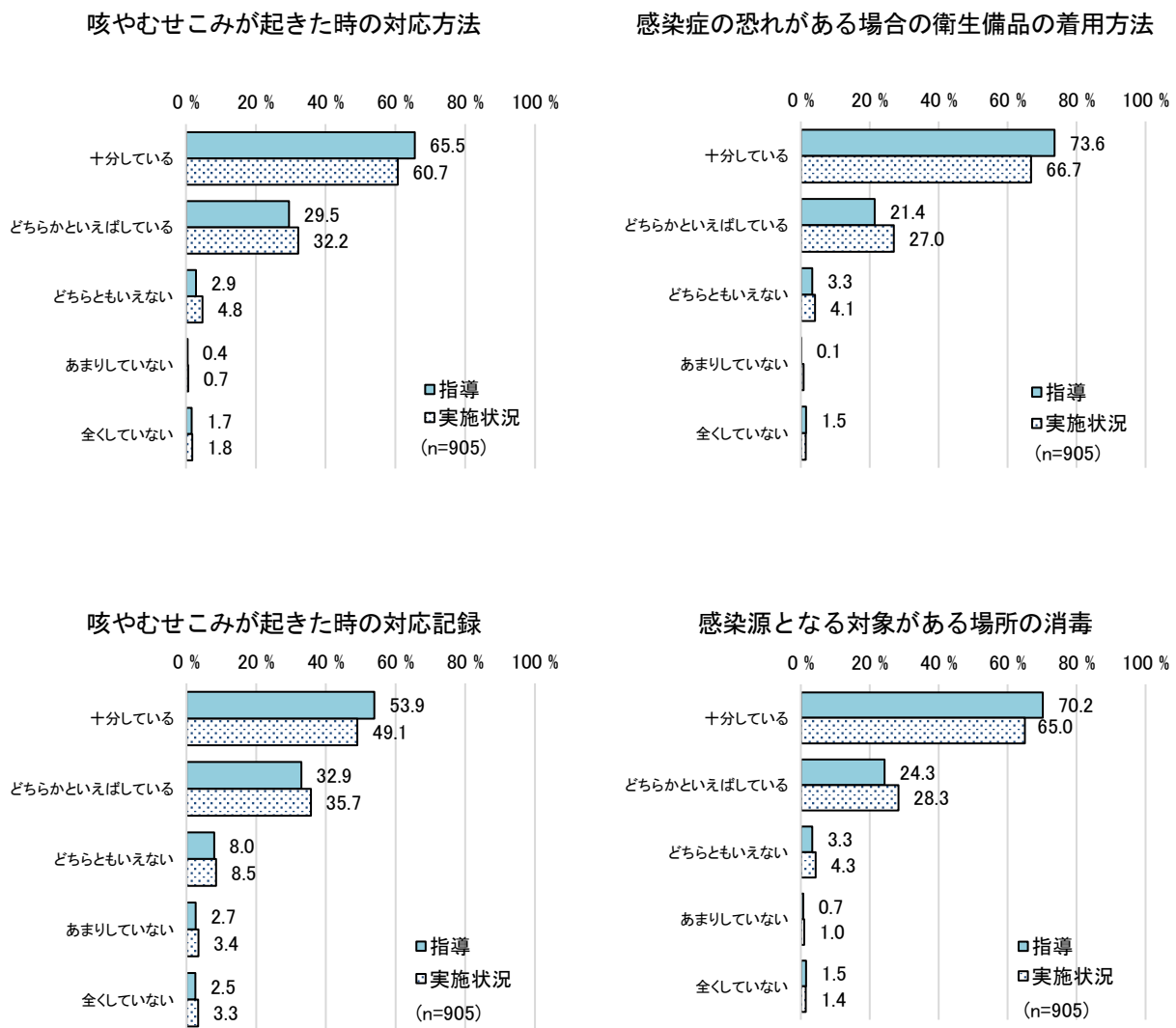
### (3) 実技試験課題との関係：安全衛生業務の指導と対応の実態について（専門級）

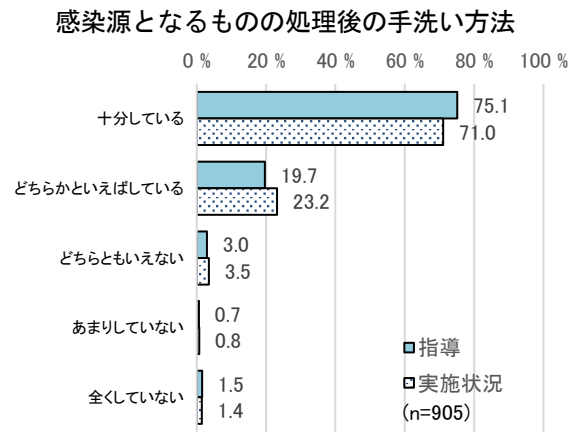
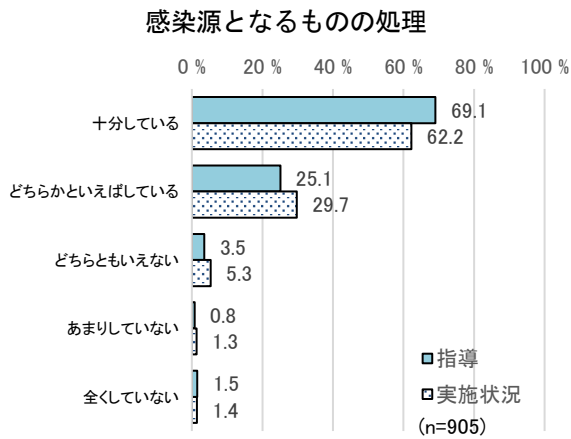
専門級の実技試験課題に即して、実習指導員による指導状況と実習生による業務実施状況を伺ったところ、「咳やむせこみが起きた時の対応記録」に関する業務では、指導員による指導が86.8%、実習生による実施が84.8%であったが、それ以外の項目では、9割以上が指導及び実習生による実施はできているとの回答であった（指導状況：「指導している」と「どちらかといえば指導している」の計、実施状況：「十分実施している」と「どちらかといえば実施している」の計）。

アンケート結果からは、安全衛生業務に関する実技試験課題と、実習指導の内容、現場の実習生の業務には、特段の齟齬や乖離は生じていないものと読み取ることができる。

#### <専門級>

図表 38 専門級における安全衛生業務の指導と対応の実態（単数回答）



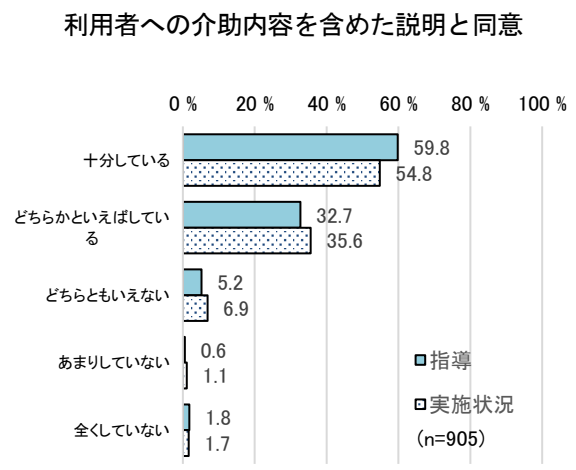
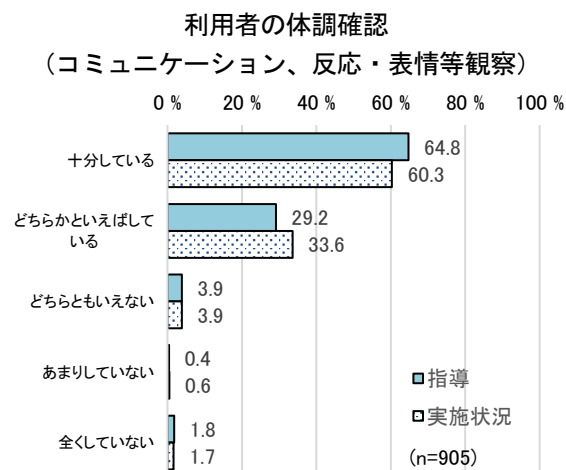


#### (4) 実技試験課題との関係：身体介護業務の指導と対応の実態について（専門級）

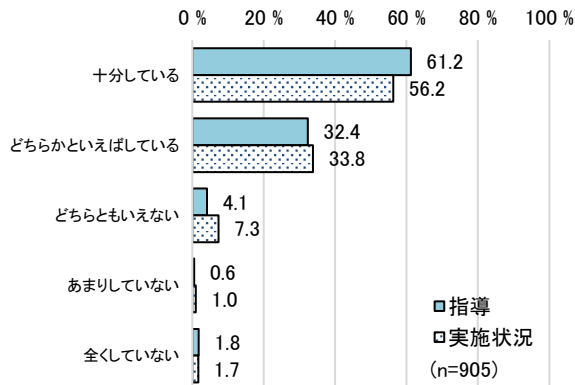
続いて、専門級の実技試験課題に即して、身体介護業務に関する実習指導員の指導状況と、実習生の実施状況を見てみると、指導状況（「十分指導している」と「どちらかといえば指導している」の計）は、すべての項目において、9割以上が「指導している」との回答であった。また、業務実施状況（「十分実施している」と「どちらかといえば実施している」の計）では、「利用者の残存機能を活かす介助方法の実施」のみ89.7%と9割未満であり、他の項目は、9割以上が現場にて実施しているとの回答であった。回答結果からは、実技試験課題と、現場指導と現場業務には特段の乖離は見られないことが読み取れる。

#### <専門級>

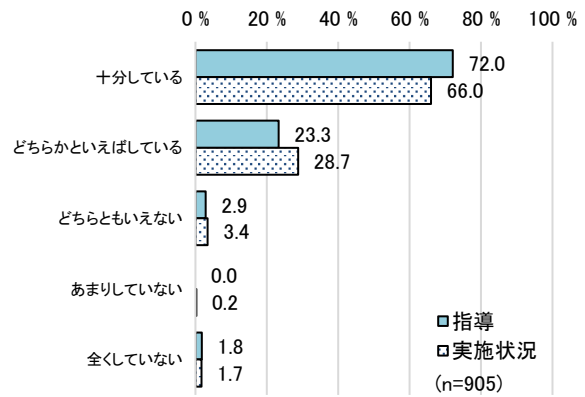
図表 39 専門級における身体介護業務の指導と対応の実態（単数回答）



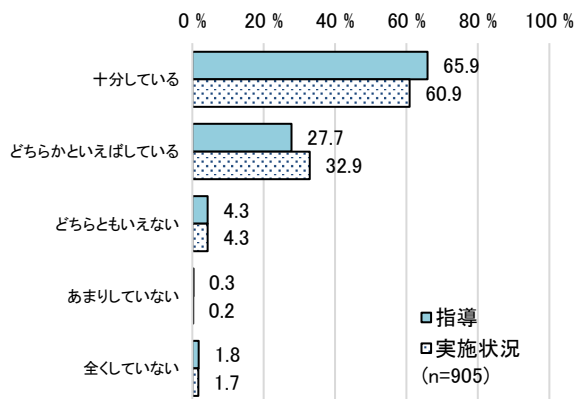
利用者の意向確認と意思尊重



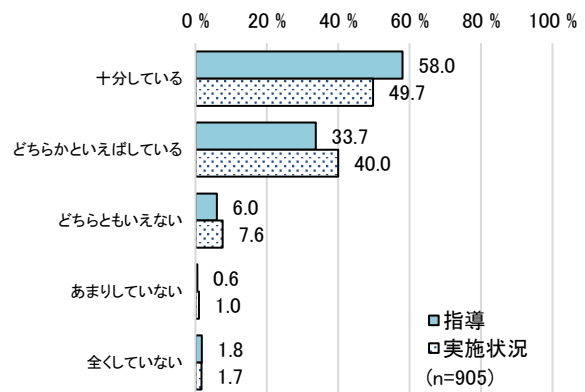
介助時の安全確認、安全な介助方法



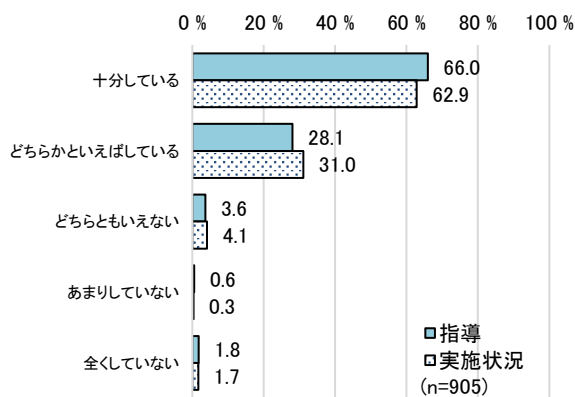
利用者のプライバシー配慮



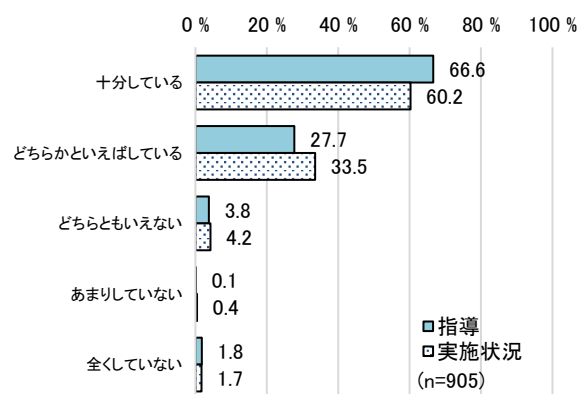
利用者の残存機能を活かす介助



介助時の必要物品の準備

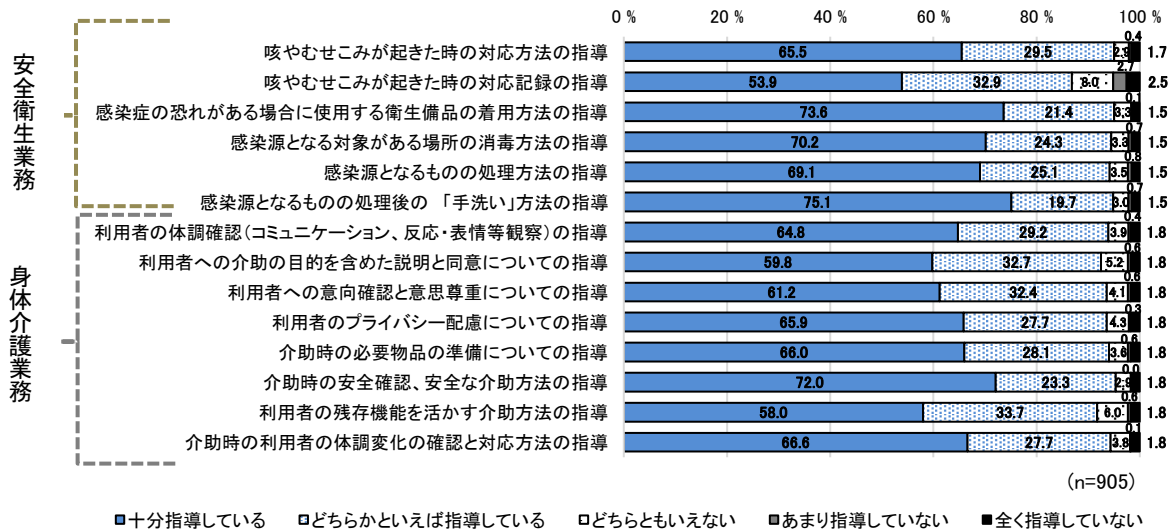


介助時の利用者の体調変化の確認と対応

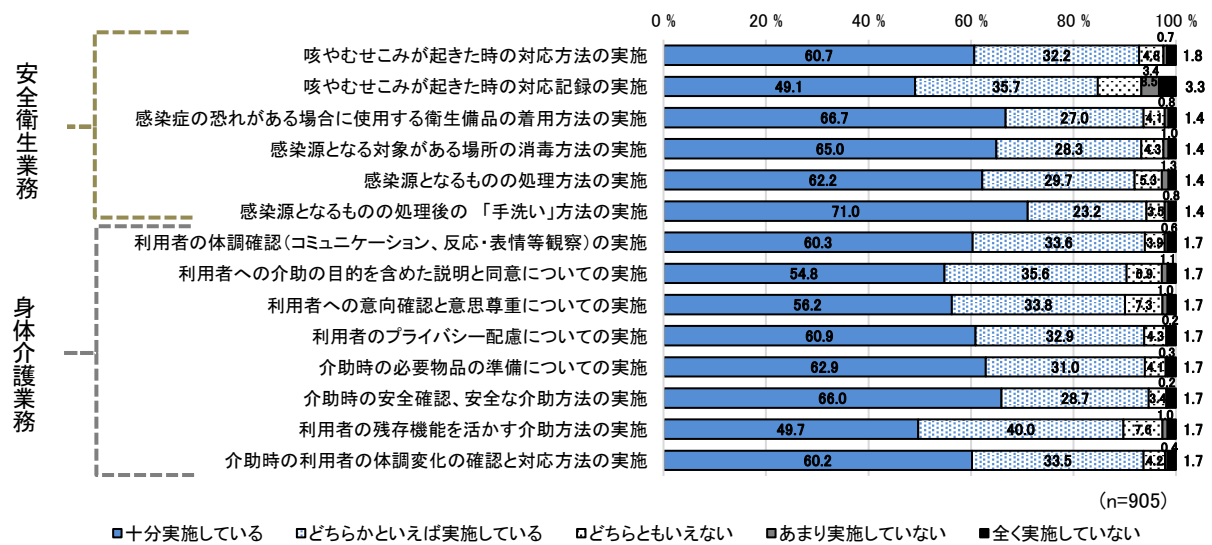


以下は、専門級の安全衛生業務及び身体介護業務について、指導状況と業務実施状況ごとにグラフ化した。(再掲)

図表 40 実技試験課題に関する指導状況\_安全衛生業務及び身体介護業務(専門級)



図表 41 実技試験課題に関する実施状況\_安全衛生業務及び身体介護業務(専門級)



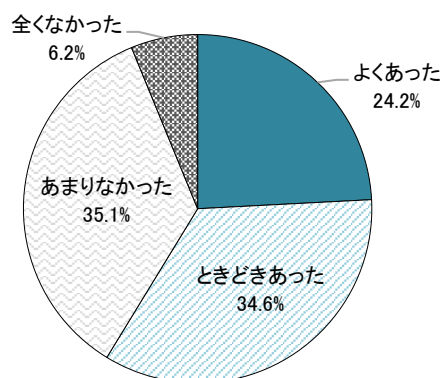


## 8. 介護技能実習評価試験の実施について

### (1) 実技試験課題の実施にあたり利用者選定で迷うケース

実技試験課題の実施にあたっての利用者選定については、約6割程度の事業所において、「選定に迷うケースがあった」（「よくあった」と「ときどきあった」の計58.8%）との回答であった。4割程度の事業所においては、「利用者選定で迷うケースはなかった」との回答である。

図表 42 実技試験課題の実施にあたり利用者選定で迷うケース（単数回答）



(n=1123)

実技試験課題の実施にあたり、利用者選定で迷われるケースの有無	n	%
よくあった	272	24.2
ときどきあった	388	34.6
あまりなかった	393	35.0
全くなかった	70	6.2
無回答	10	
全体	1123	100.0

## (2) 実技試験課題の実施にあたり利用者選定で迷うケース（具体例）

具体的に、利用者選定に迷ったケースとしては、実技試験に合致した状態像の利用者の選定、協力をえることが難しい等の回答があげられた。以下に回答例を示す。（抜粋）

### 【評価項目を意識した利用者の選定が難しい（意思疎通の状況、麻痺の有無、座位安定の有無等）】

- ・ 意思疎通ができて片麻痺の方という利用者様で選定しようとするのが難しかった。実際は動きが合っているかの方が大事だと分かった
- ・ 説明と同意がポイントであるが、意思疎通のできる方が限られており、その上で一部介助を必要とし、ある程度座位が保てる方と条件が限られているため、迷うというより条件を満たす方を選出するのに困ります
- ・ 利用者の同意が取れる方は、必要介助量が少ない傾向にある
- ・ 専門級の食事介助に置いて、意思疎通がある程度でき、自分で食べられないこともないが介助が必要、という丁度よい利用者がおらず選定を迷ったことがあった
- ・ （寝たきりで）車椅子に乗れる患者さんがあまりなくて、選定にとっても苦労しました
- ・ （認知症の方）身体介助が必要だったり、車いすを利用する利用者様がない
- ・ 実技試験を行った際、マイナス評価をされそうな（声かけしても反応がない・こちらの意図が通じないなど）利用者しかいない場合
- ・ どれ位のADLの方が良いのか迷いがあった

### 【利用者・家族の同意が得られない】

- ・ 認知症が重度の方が多いため、実技試験のモデルであるという理解ができる方が少ない
- ・ 対象者の方の家族の同意を得られないことがある

### 【利用者の状態の変化がある】

- ・ 利用者の体調不良により直前に変更が必要となる場合があった
- ・ 認知症のためその日、その時で声掛けに対する返答が変わったり行えなかったりする
- ・ 認知症があったりしてその場でご本人様の状態がその時によって変わるとき

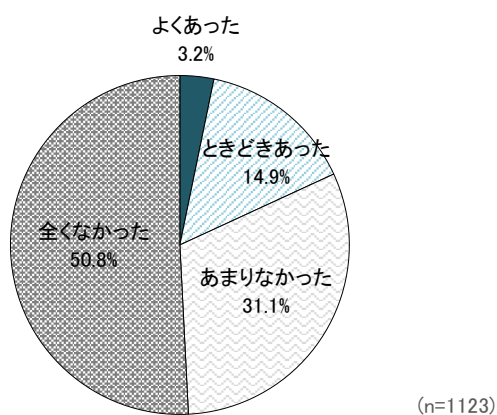
### 【同じ利用者が選定される】

- ・ 自立した方が少なかった際に、同じ方が試験協力者として選ばれてしまうこと

### (3) 実技試験課題の実施にあたり利用者の同意が得られないケース

実技試験課題の実施にあたり利用者の同意が得られないケースは約2割程度（「よくあった」と「ときどきあった」の計）であり、8割超の事業所では、実技試験課題実施にあたり、利用者同意が得られていると読み取れる。

図表 43 実技試験課題の実施にあたり利用者の同意が得られないケース（単数回答）

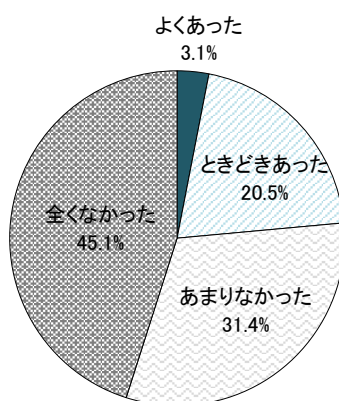


実技試験課題の実施にあたり、 利用者の同意が得られないケース	n	%
よくあった	36	3.2
ときどきあった	167	14.9
あまりなかった	350	31.2
全くなかった	570	50.8
無回答	10	
全体	1123	100.0

#### (4) 実技試験の実施にあたり試験直前（試験実施日）に利用者を変更した経験

実技試験の実施にあたり試験直前（試験実施日）に利用者を変更した経験は、2割程度（「よくあった」と「ときどきあった」の計）であり、76.5%の事業所では、特段の利用者変更はしていないとの回答であった（「あまりなかった」と「全くなかった」の計）。

図表 44 実技試験課題の実施にあたり試験直前（試験実施日）に利用者を変更した経験（単数回答）



(n=1123)

実技試験課題の実施にあたり、 試験直前（試験実施日）に利用者を変更することの有無	n	%
よくあった	35	3.1
ときどきあった	230	20.5
あまりなかった	353	31.4
全くなかった	505	45.0
無回答	10	
全体	1123	100.0

## (5) 試験直前（試験実施日）に利用者を変更するにあたり対応したこと（自由回答）

試験実施日の利用者変更について、具体的にはどのような対応であったかを伺ったところ、以下のような回答があげられた。（以下、一部抜粋）

### 【事前に複数名の利用者を選定】

- ・ あらかじめ変更を予測して、候補者を数名選出して、そのような事態に備えて、違う候補者で対応した
- ・ 事前に予備の利用者の方にも、当日に突発的にお願いするかもしれないことを告知し理解をもらっていた
- ・ 試験前日又は当日看護師より発熱や風邪症状、身体の痛みがあると報告があった場合にはリストから外して評価者にその旨をお伝えしています。当日、ご本人からの申し出でどうしても協力が得られなくなってしまった場合にも同様の対応をしています
- ・ 体調不良等で変更の可能性を考慮し、事前に複数の利用者に協力していただき練習できていた為、特に困ることはなかった

### 【体調が安定されている方を選定】

- ・ 事前に当日体調不良に陥りにくそうな利用者様を選んでいました。また、変更時は融通の利きそうな利用者様に依頼した
- ・ 予定していた利用者が、当日、介助拒否が強くなってしまった。急遽、やや自立度の高い利用者に変更してもらった

### 【利用者の体調・意向を優先】

- ・ 順番を待っている間に寝てしまった。いつもは声掛けで覚醒出来るが、その時は覚醒できず返事してもらえなかった為、急遽別の方に変更した
- ・ 気分の浮き沈みにより試験日に、一か所に留まることが困難な場合や他害が激しい時に変更
- ・ 認知症の方や気分の変動が多々見られる方など、当日に変更せざるを得なかったが、無理強いはせず日常の対応に移した

### 【事前練習なしの対応】

- ・ 通常は事前に利用者と課題への対応練習を行って臨むが、全く対応練習を行っていない利用者へ変更せざるを得なかった
- ・ その日の試験官により試験ごとに選定されるので、事前の練習に協力してもらっていた利用者が選定されないケースも出てくる

## (6) 介護技能実習評価試験（全般）についてのご意見

介護技能実習評価試験（全般）についての意見を自由回答形式で回答を求めたところ、以下のよう  
な回答があげられた。（以下、一部抜粋）

### 【介護技能実習評価試験の機会があることについて】

技能実習生に対しては、モチベーション向上や自己研鑽、成長、自身の振り返りに繋がるとい  
った意見があり、指導員に対しては、実習生のレベルや課題の把握、指導方法や自身の介護方法  
の見直し、指導員の成長や自信に繋がったという意見が見られた。

- ・ 試験に合格したということで技能実習生の自信やモチベーションのアップにつながっている
- ・ 実習生間で介護技術の意見交換や介助の手法、筆記試験等について学べることができ実際に指  
導員の意見交換や指導方法にも再チェック、指導方法にも繋がり良いと感じる
- ・ 知識や技術の習得具合や熟練度が確認出来てとても良い機会です。初級から専門級、専門級か  
ら上級と一人一人の成長がしっかりと確認出来て、OJT で指導している現場職員の状況も見る  
ことが出来てとてもよい機会となっています
- ・ 日本人職員も実習生を受入れるようになって、適切な声掛けや介護ができるようになり、試験  
にむけて指導員も再度勉強することができ成長に繋がった
- ・ 基本的介護所作についての大切な試験だと思う

### 【介護技能実習評価試験に係る指導場面にに関して】

教材に関する意見のほか、実習生の日本語能力による指導の難しさや、人員不足により指導や  
試験準備に十分な時間を確保できないといった指導環境に関する回答があった。

#### 教材

- ・ 過去問や練習問題を多数共有してほしい（学科試験）
- ・ 実習生が自習できるようにビデオ教材等を作ってほしい（実技試験）
- ・ 初めての経験であったため、実技試験の内容について、どのように準備をすべきかわからな  
かった。某施設配信のYouTube が頼りであった（実技試験）

#### 指導方法

- ・ 学科試験での日本語の理解が出来るように、日頃から標準語の理解をしてもらうように気を  
付けていくように技能実習指導員への指導を必要であると思った
- ・ 技能実習生は実際に現場で行っているケアと評価試験でのケアの内容の違いを少なからず感  
じている。技能実習生がそのように感じないように現場のケアの標準化に取り組んでいき  
たい
- ・ 指導する側も日々の介護現場のケアを見直す場となる為、一緒に再度学ぶ事ができています

### 【介護技能実習評価試験に係る試験場面にに関して】

#### 学科試験

- ・ 筆記試験の範囲が広く、負担感が大きい事、日本語のニュアンスが理解できず、本来はわかっ  
ていることでも回答できず実力が発揮しきれない面もあった
- ・ 実技試験は事前の指導等で対応できるが、筆記試験に関しては、個人差が出やすく、日本語習  
得意欲がない実習生は案外得点が得られないように感じる

## 実技試験

- ・ 初めて行う施設は、手順が分からず、どう進めてよいか（実習生への声掛け指導）などで迷う事があると思いますので、指導員の実習生に対する試験対応があれば、進め易いと思いました
- ・ 初級の実技試験は一つ一つの指示と報告を求める内容であったが、日常すでに実際に行えている能力に比べて基本的すぎて、かえって対応が難しく指示を出す指導員の訓練が必要となった
- ・ 一つ一つのケアの後の体調確認が、実際に行っているケアと比べて多いという印象
- ・ 実技試験の際、試験員が口頭でする質問の日本語がニュアンス的に外国人には難しい時がある
- ・ 学科試験での日本語の理解が出来るように、日頃から標準語の理解をしてもらうように気を付けていくように技能実習指導員への指導を必要であると思った
- ・ 技能実習生は実際に現場で行っているケアと評価試験でのケアの内容に違いを少なからず感じている。技能実習生がそのように感じないように現場のケアの標準化に取り組んでいきたい
- ・ 実際の利用者で試験を実施するという事は、かなりハードルが高かった。認知症の方への声かけや返答が予想できず、臨機応変に対応するところが難しかった
- ・ 実技試験の課題については老人系ばかりではなく、障害福祉系の対象者（麻痺等）も考慮して頂きたい
- ・ （技能実習生は非常に優秀で、気の利く人が多いので）もう少し流動的な仕事でも臨機応変に対応できる様を評価できるような試験であって欲しい

## 【キャリアパス】

- ・ 評価試験から介護福祉士まである程度繋がっている内容だと人員も学習も色々兼ねることができる為、双方助かる

## 【試験のタイミングについて】

- ・ 入職から初級評価試験まで、その年により実務期間の差があった。7ヶ月の場合はまだ不慣れな部分もあり、且つ日本語の習得もあまりできていない為、学科と実技の指導に時間を有した

## 【結果のフィードバックについて】

- ・ 試験の結果を指導者限定で公表してもよいのではないかと。結果を公表することで、指導にあたる実習生の苦手な点を把握することができたり、勘違いしたままになっているところについても普段の業務で適切に指導にあたる事が可能になるのではないかと

## 9. クロス集計：現状スキルの把握方法：評価基準を用いた評価実施群／未使用群別

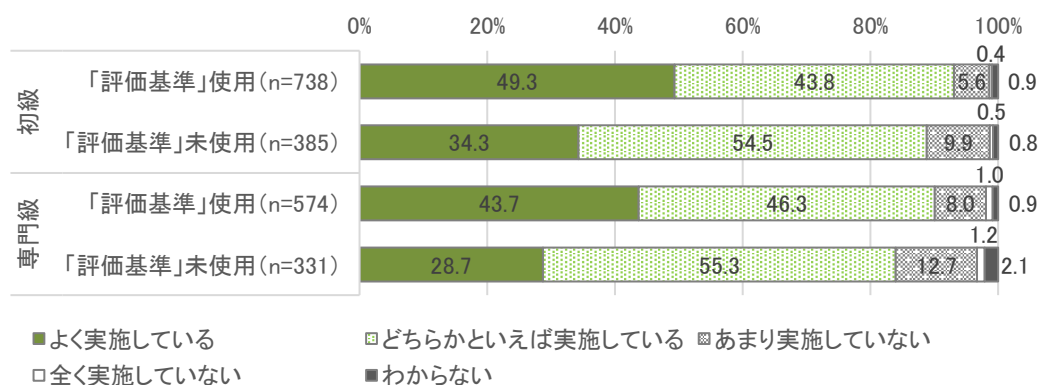
技能実習生の現状スキルの把握方法として、「評価基準」を用いた評価を実施している群と、「評価基準」未使用群（問 6-7）について、技能実習指導状況、評価試験に向けた対応の取組をみてみると、「指導者間での対応方法のすり合わせ（問 5-1）」、「試験課題の内容把握状況（問 6-1）」、「評価試験に向けての学習や準備状況（問 6-2）」、「評価試験前までの実習内容の実施状況（問 6-3）」、「試験に関する振り返りやフィードバック等（問 6-5）」、試験後の「指導方法の見直し（問 6-6-1）」、「学習進捗差の解消（問 6-9）」、「技能実習生の姿勢（問 6-10）」、「日本語の理解度（問 6-11）」のいずれにおいても、「評価基準」を使用した評価を実施している群の方が、評価基準を用いていない群よりも、「よく実施している」「十分実施できている」等の回答が高い傾向が示された。

OJTの仕方として、評価基準を用いた評価を伴い、技能実習制度に臨んでいる事業所群の方が、計画的にOJTが行われていると読み取ることができる。

### (1) 指導者間での介助の手法や対応方法のすり合わせ実施状況

初級、専門級のどちらについても、「評価基準」を用いてスキル把握の評価を行っている事業所・施設の群の方が、評価基準未使用群に比べ、指導者間で指導する介助の手法や、対応方法のすり合わせを「よく実施している」と回答した割合が高い傾向が示された。

図表 45 現状スキルの確認方法で「評価基準」使用・指導者間で介助の手法や対応方法のすり合わせ実施状況

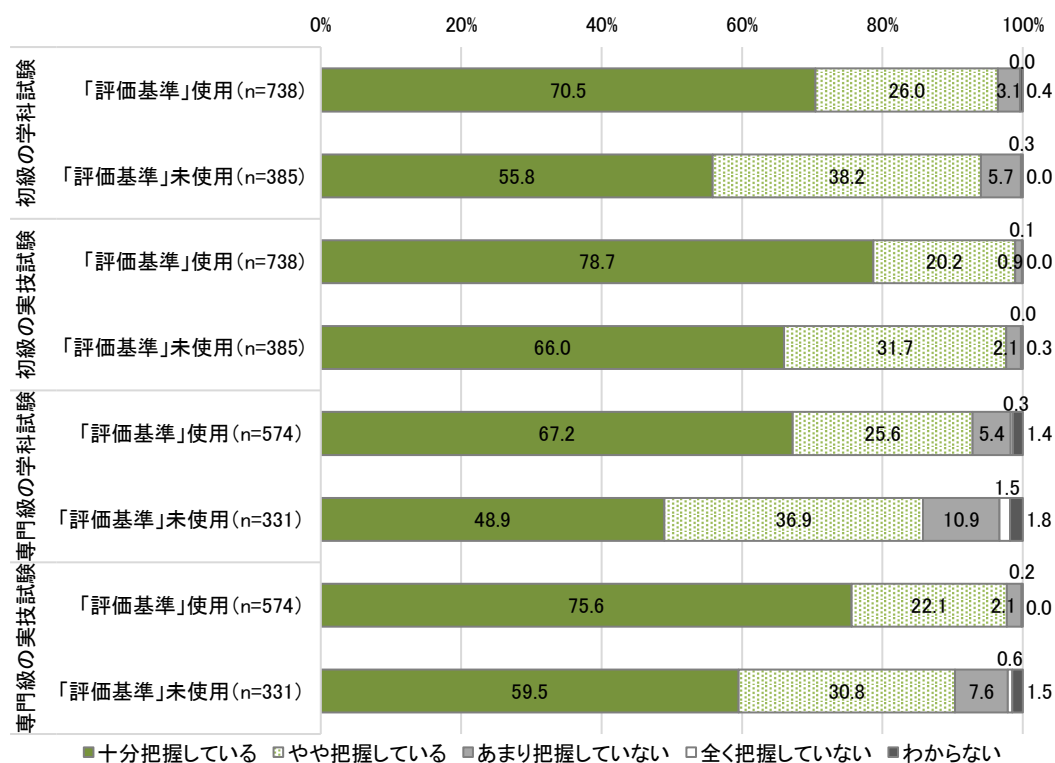




## (2) 介護技能実習評価試験の試験課題の内容把握状況

「初級の学科試験」、「初級の実技試験」、「専門級の学科試験」、「専門級の実技試験」のいずれにおいても、「評価基準」を使用して評価を実施している群の方が、「評価基準」未使用群と比べ介護技能実習評価試験の試験課題の内容を「十分把握している」と回答した割合が高い傾向であった。

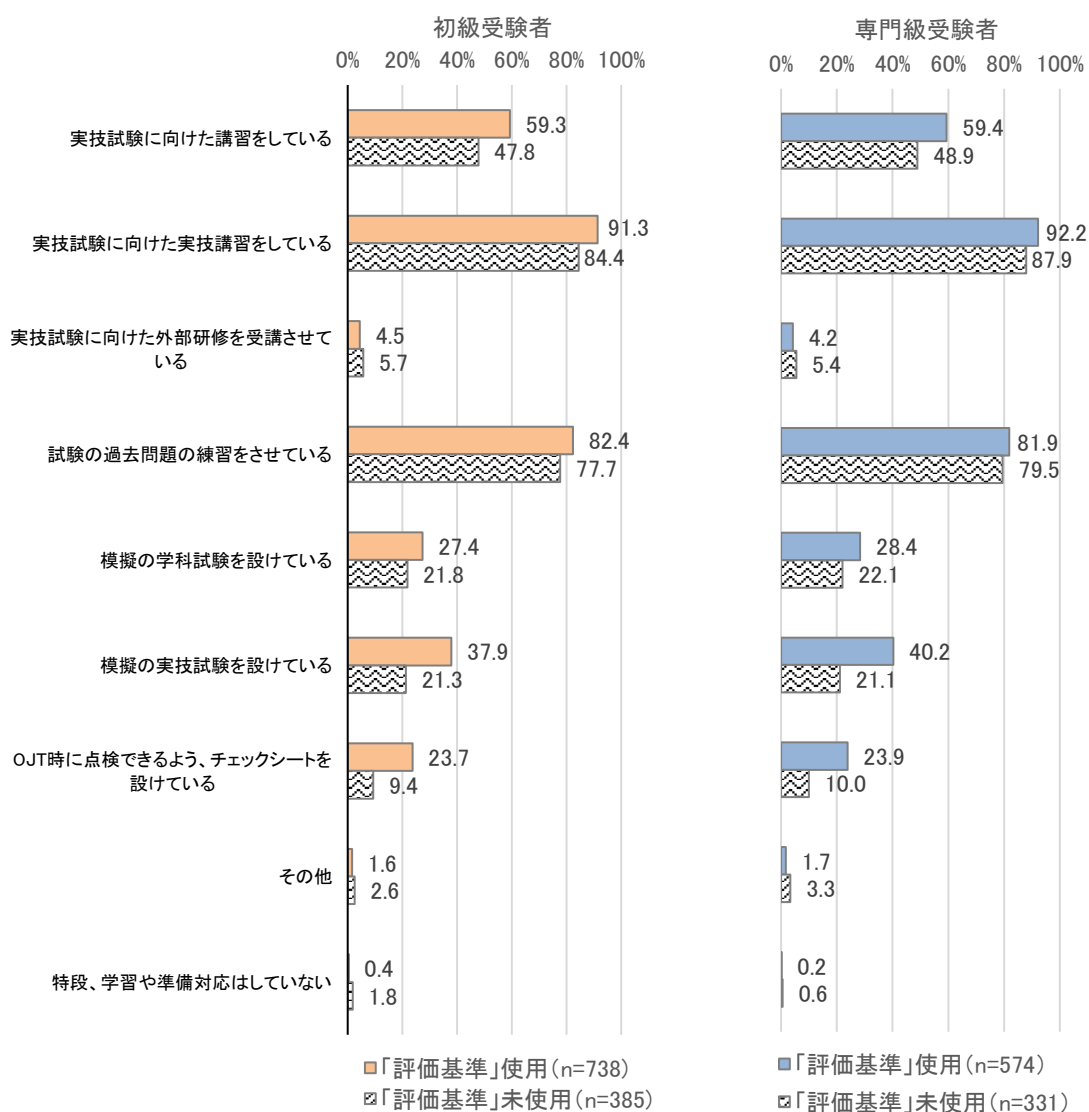
図表 46 介護技能実習評価試験の試験課題の内容把握状況



### (3) 介護技能実習評価試験に向けた学習や準備状況

介護技能実習評価試験に向けてしている学習や準備状況について、「実技試験に向けた外部研修を受講させている」以外の項目においては、「評価基準」を使用して評価を行っている群の方が、「評価基準」未使用群に比べて、いずれも高い傾向であった。

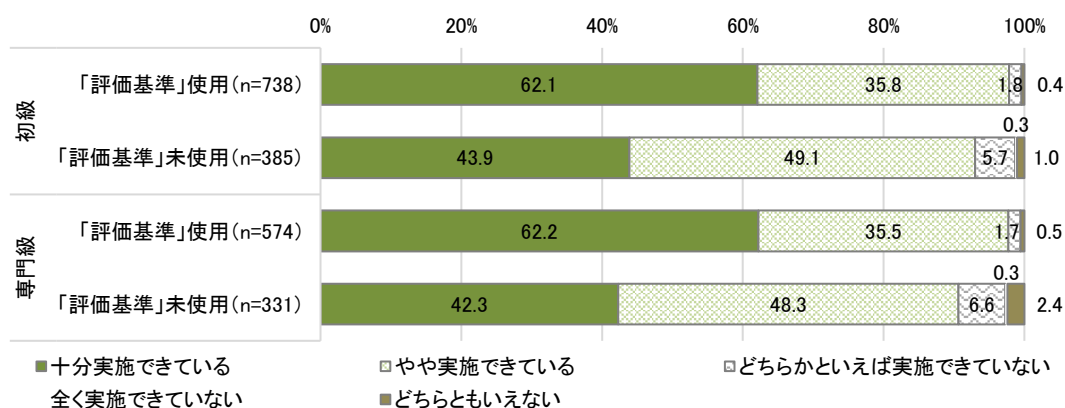
図表 47 介護技能実習評価試験に向けた学習や準備状況



#### (4) 介護技能評価試験前までの実習内容の実施状況

介護技能実習評価試験前までの実習内容の実施状況についても、「評価基準」を用いた評価をしている群の方が、「評価基準」未使用群よりも、初級・専門級のいずれについても、「十分実施できている」との回答が20ポイント程高く、評価基準を用いた評価実施群の方が、所定の期間内での実習進捗についても、より高い傾向が読み取れる。

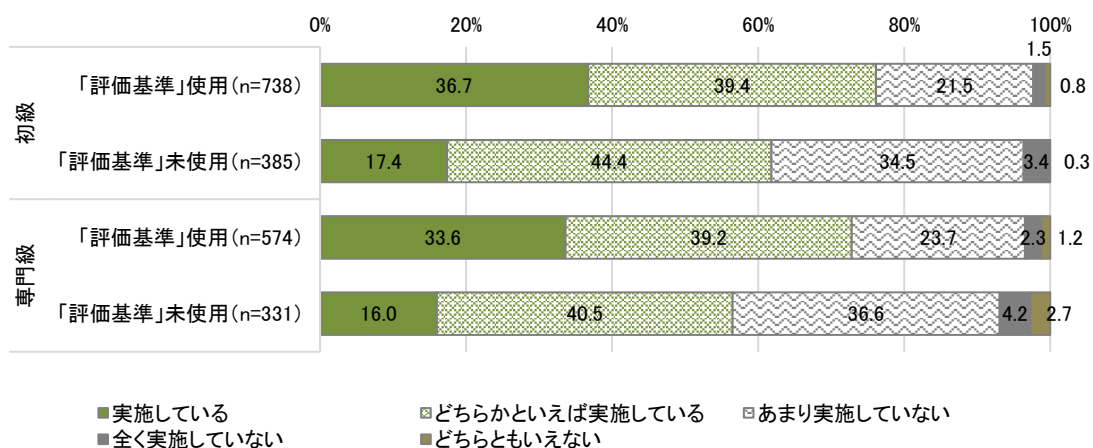
図表 48 介護技能評価試験前までの実習内容の実施状況



#### (5) 試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等の実施状況

初級、専門級のどちらについても、現状スキルの把握方法で「評価基準」を使用し評価している群の方が、「評価基準」未使用群に比べ、試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等を「よく実施している」と回答した割合が約20ポイント高い傾向であった。

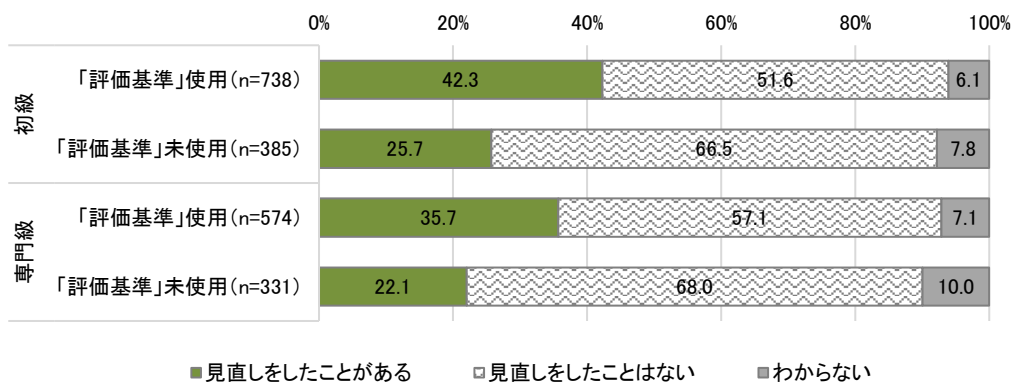
図表 49 試験の振り返りやフィードバック、技術の修正等の実施状況



## (6) 介護技能実習評価試験を受けて、指導方法の見直しを行った経験

初級、専門級のどちらについても、現状スキルの把握方法で「評価基準」を使用し評価を実施している群の方が、「評価基準」未使用群に比べて、介護技能実習評価試験を受け、指導方法の「見直しをしたことがある」と回答した割合が高い傾向であった。

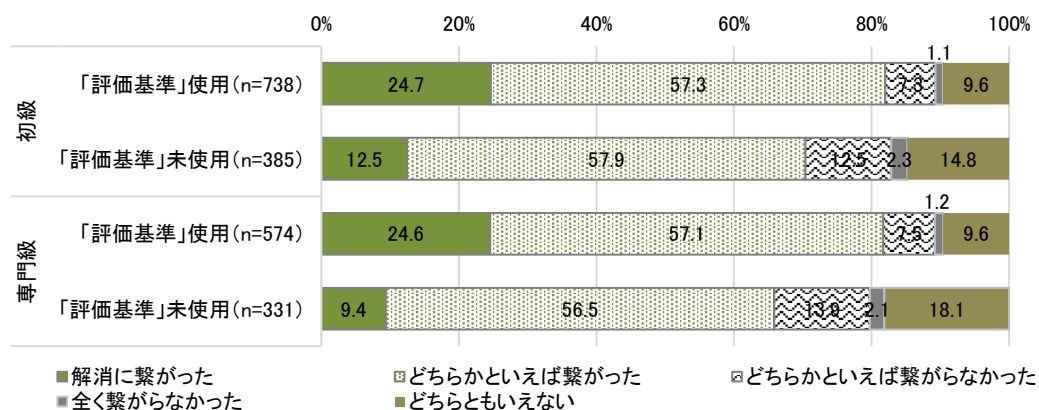
図表 50 介護技能実習評価試験を受けて、指導方法の見直しを行った経験



## (7) 技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか

初級、専門級のどちらについても、現状スキルの把握方法で「評価基準」を使用して評価をしている群の方が、介護技能実習評価試験に向けた対応や受検により技能実習生間の学習進捗差の「解消に繋がった」と回答した割合が高く、「評価基準」未使用群と比較して10ポイント以上の差があった。

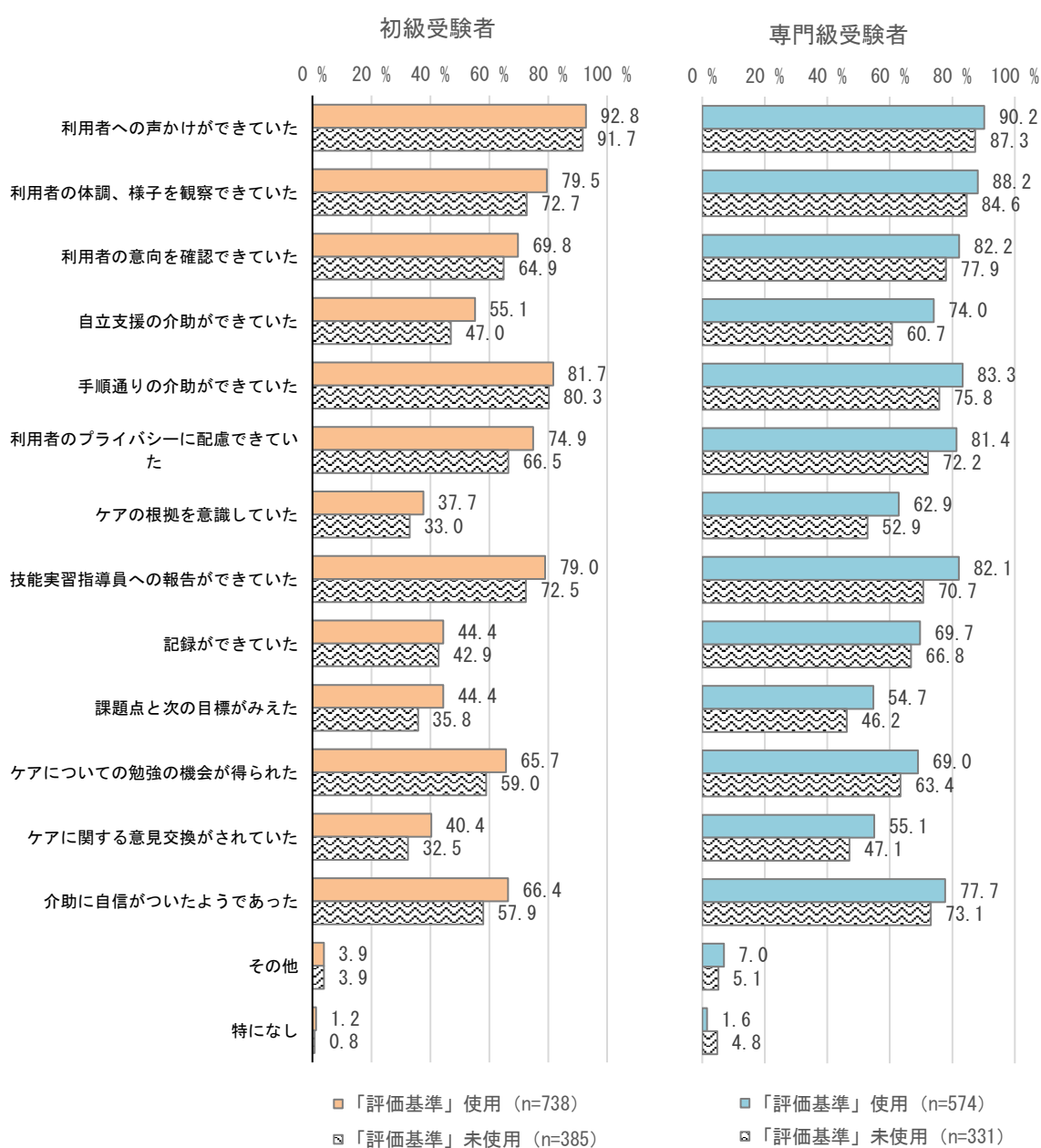
図表 51 技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか



## (8) 技能実習生の業務でみられた姿勢

介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて、技能実習生の業務でみられた姿勢として、初級、専門級ともに、「評価基準」を使用して評価を実施している群の方が、「評価基準」未使用群に比べて、各項目につき高い傾向が示された。(初級では、「課題点と次の目標がみえた」(8.6ポイント差)、「利用者のプライバシーに配慮できていた」(8.4ポイント差)、「自立支援の介助ができていた」(8.1ポイント差)、「ケアに関する意見交換がされていた」(7.9ポイント差)等。専門級では、「自立支援の介助ができていた」(13.3ポイント差)、「技能実習指導員への報告ができていた」(11.4ポイント差)、「ケアの根拠を意識していた」(10ポイント差)、「利用者のプライバシーに配慮できていた」(9.2ポイント差)、「課題点と次の目標がみえた」(8.5ポイント差)等。)

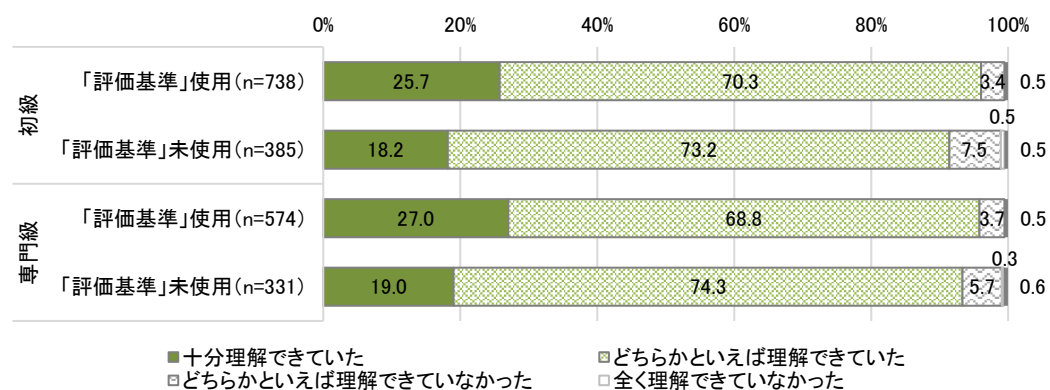
図表 52 技能実習生の業務でみられた姿勢



## (9) 実技課題の日本語の理解度

技能実習生の学科試験問題（過去問を含む）や実技課題の日本語の理解度について、「評価基準」を使用し評価を実施している群の方が、未使用群に比べて、「十分理解できていた」と回答した割合が高い傾向であった。

図表 53 実技課題の日本語の理解度



## 10. クロス集計：介護技能実習制度の学習方法の他職員への活用状況：活用群／未活用群別

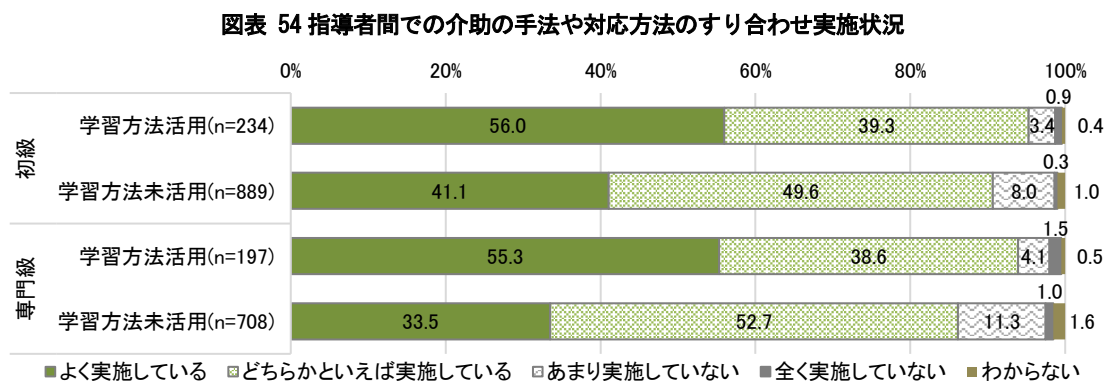
また、介護の技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を、他の介護人材の育成にも活用しているかどうか、すなわち、評価試験が組み込まれ、計画的なOJTを展開するという、介護の技能実習制度の学習方法を、他の介護職員の教育にも活用している群と未活用群で比較したところ、以下の実習指導状況の設問や、評価試験に向けた対応の取組において、いずれも活用群の方が高い傾向が示された。

(「指導者間での対応方法のすり合わせ (問 5-1)」、「試験課題の内容把握状況 (問 6-1)」、「評価試験に向けての学習や準備状況 (問 6-2)」、「評価試験前までの実習内容の実施状況 (問 6-3)」、「試験に関する振り返りやフィードバック等 (問 6-5)」、「試験後の「指導方法の見直し (問 6-6-1)」、「学習進捗差の解消 (問 6-9)」、「技能実習生の姿勢 (問 6-10)」、「日本語の理解度 (問 6-11)」、「日本語教育の対応 (問 6-12)」)。

技能実習制度に組み込まれた体系的なOJTの仕方や学習の情報を、事業所の他の職員(日本人職員、他の在留資格の外国人材等)の学習にも活用している群においては、技能実習生に対して、より体系的なOJTが行われているものとも読み取ることができる。

### (1) 指導者間での介助の手法や対応方法のすり合わせ実施状況

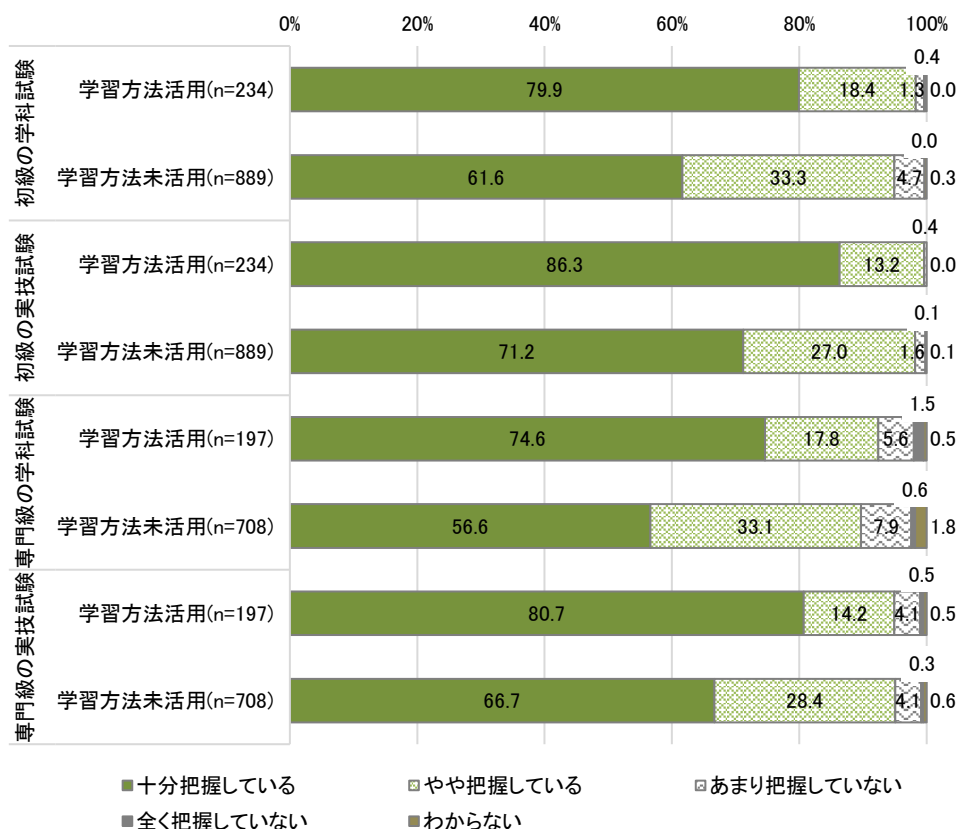
初級、専門級のどちらについても、技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を他の介護人材の育成に活用している群の方が、未活用群に比べ、指導者間で指導する介助の手法や、対応方法のすり合わせを「よく実施している」と回答した割合が高い傾向がみられた。



## (2) 介護技能実習評価試験の試験課題の内容把握状況

「初級の学科試験」、「初級の実技試験」、「専門級の学科試験」、「専門級の実技試験」のいずれにおいても、技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を他の介護人材の育成に活用している群の方が、未活用群に比べ、介護技能実習評価試験の試験課題の内容を「十分把握している」と回答した割合が高い傾向であった。

図表 55 介護技能実習評価試験の試験課題の内容把握状況

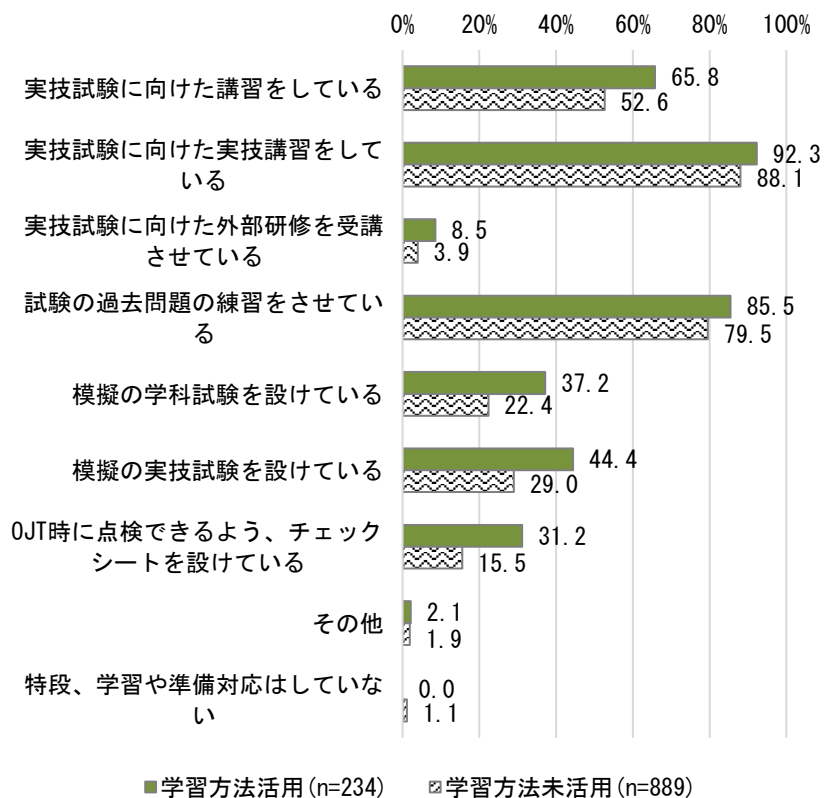




### (3) 介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況

介護技能実習評価試験に向けての学習・準備状況について、技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を他の介護人材の育成に活用している群の方が、未活用群に比べて、いずれの項目でも高い傾向であった。

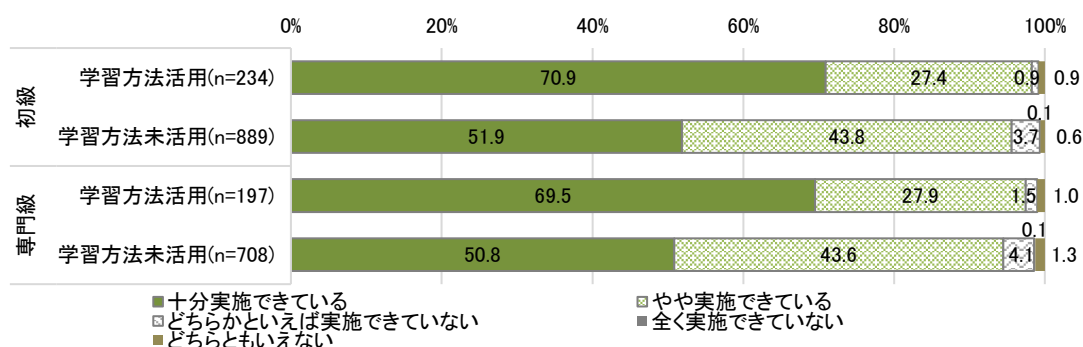
図表 56 介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況



#### (4) 介護技能評価試験前までの実習内容の実施状況

「技能実習実施計画」や「介護職種 技能実習評価試験の試験科目及びその範囲並びにその細目」の実習内容を介護技能評価試験前までに全て実施できているか否かについて、初級、専門級のいずれにおいても、技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を他の介護人材の育成にも活用している群の方が、未活用群に比べて、「十分実施できている」と回答した割合が高い傾向であった。

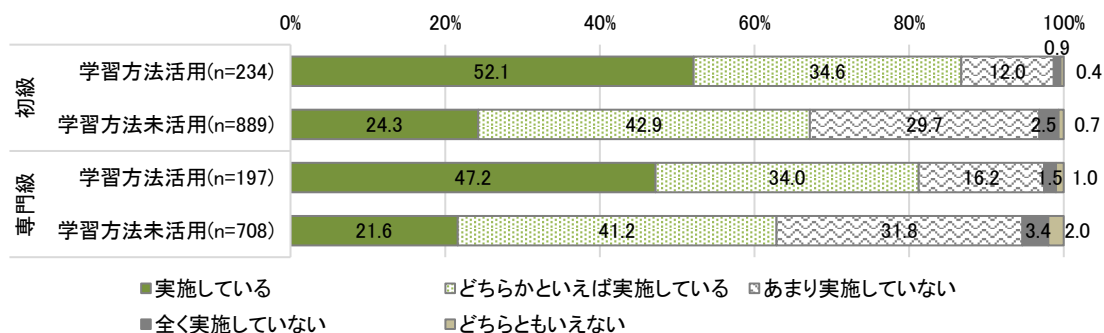
図表 57 介護技能評価試験前までの実習内容の実施状況



#### (5) 試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等の実施状況

介護技能実習評価試験後に、技能実習生に対して試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等を行っているか否かについても、初級、専門級のいずれにおいても、学習方法活用群の方が、未活用群に比べて実施の割合が高い傾向であった。

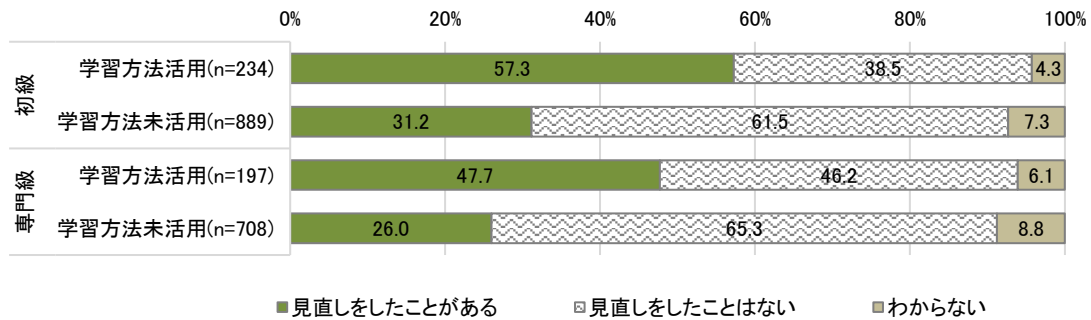
図表 58 試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正等の実施状況



(6) 介護技能実習評価試験を受けて、指導方法の見直しを行った経験

介護技能実習評価試験後を受けての指導方法の見直し経験についても、初級、専門級のいずれにおいても、学習方法活用群の方が、未活用群に比べて、見直しを行っている傾向が見られた。

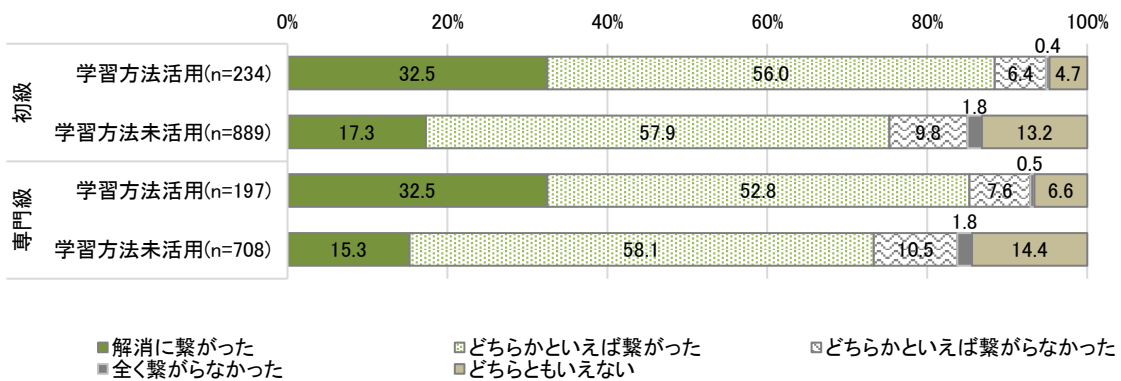
図表 59 指導方法の見直しを行った経験



(7) 技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか

介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は、技能実習生の学習進捗の解消に繋がったか否かについて、初級、専門級のいずれにおいても、学習方法活用群の方が、未活用群に比べて、「解消に繋がった」との回答割合が高い傾向であった。

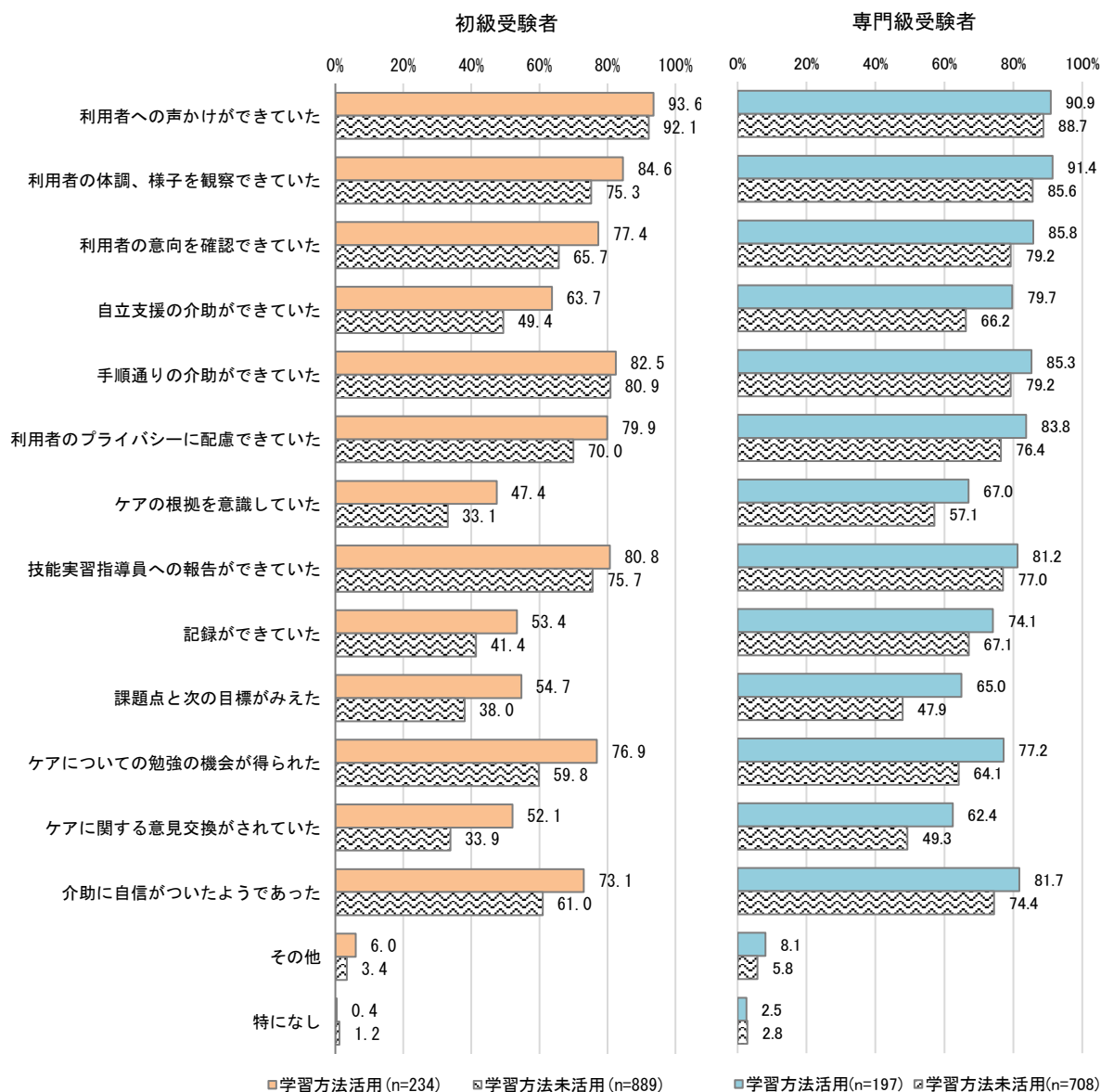
図表 60 技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったか



## (8) 技能実習生の業務でみられた姿勢

介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて、技能実習生の業務でみられた姿勢について、初級、専門級それぞれにつき、学習方法活用群の方が、未活用群に比べていずれの項目でも高い傾向であった。

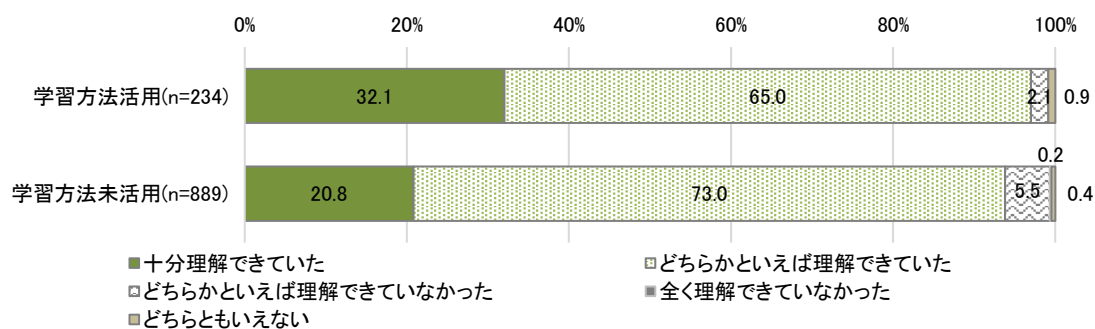
図表 61 技能実習生の業務でみられた姿勢



## (9) 実技課題の日本語の理解度

技能実習生の学科試験問題（過去問を含む）や実技課題の日本語の理解度について、学習方法活用群の方が、未活用群に比べて、「十分理解できていた」と回答した割合が高い傾向であった。

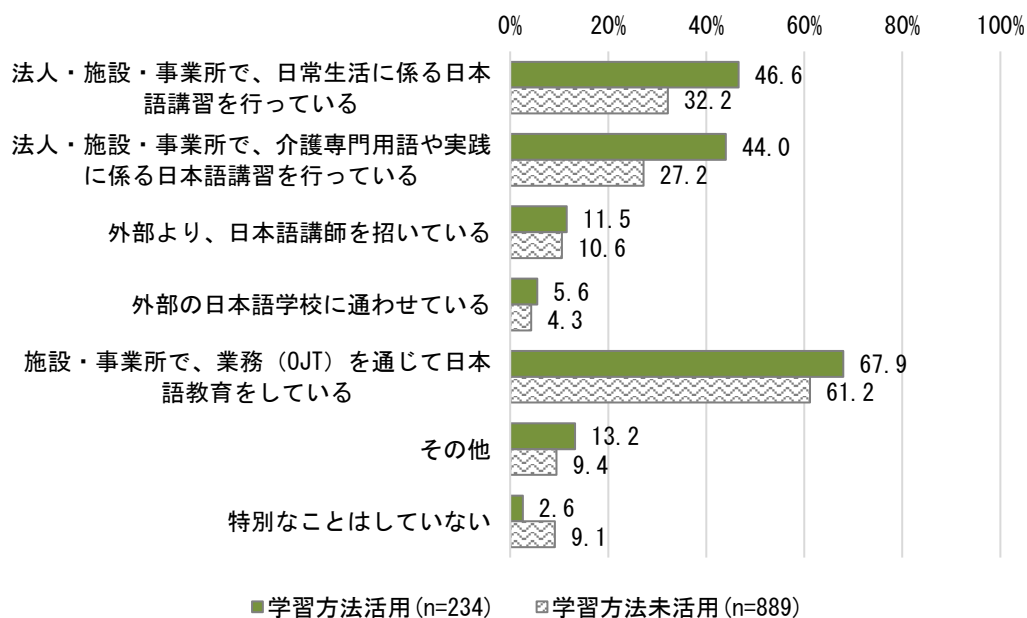
図表 62 学習方法の活用状況別・実技課題の日本語の理解度



## (10) 技能実習生への日本語教育の対応

技能実習生への日本語教育の対応について、学習方法活用群の方が、未活用群に比べて、日本語教育の実施においても、各項目につき高い傾向がみられた。

図表 63 学習方法の活用状況別・技能実習生への日本語教育の対応



## 11. 技能実習指導員へのアンケートのまとめ・考察

### (1) 主たる調査結果（単純集計結果）

1. 施設・事業所の属性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 法人種別：「社会福祉法人（社協以外）」55.1%、「医療法人」22.4%、「営利法人」16.3%</li> <li>・ サービス種別：「介護老人福祉施設」46.5%、「介護老人保健施設」13.2%、病院・診療所10.8%</li> </ul>
2. 回答者属性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護業務経験年数：「15年以上」が61.7%、「10年以上15年未満」25.9%、「9年以上10年未満」3.6%</li> <li>・ 担当した技能実習生の人数： <ul style="list-style-type: none"> <li>初 級：平均値4.5人、中央値4.0人</li> <li>専門級：平均値2.7人、中央値2.0人</li> <li>上 級：平均値0.2人、中央値0.0人</li> </ul> </li> <li>・ 「介護福祉士」以外に有する資格または受講した講習等：「介護の技能実習指導員講習会」35.7%、「介護支援専門員（ケアマネジャー）」30.9%、「介護福祉士実習指導者講習 修了」25.7%</li> </ul>
3. 外国人介護人材の受入れ状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2023年12月1日時点における外国人介護人材の累積人数：平均値：7.8人、中央値：6.0人</li> <li>・ 2023年12月1日時点における在留資格別の技能実習生の人数： <ul style="list-style-type: none"> <li>第1号技能実習：平均値1.4人、中央値0.0人</li> <li>第2号技能実習：平均値2.2人、中央値2.0人</li> <li>第3号技能実習：平均値0.3人、中央値0.0人</li> </ul> </li> <li>・ 2023年12月1日現在までの技能実習生の評価試験受検実績： <ul style="list-style-type: none"> <li>初 級：平均値5.0人、中央値4.0人</li> <li>専門級：平均値2.7人、中央値2.0人</li> <li>上 級：平均値0.2人、中央値0.0人</li> </ul> </li> <li>・ 次の級に進まなかった技能実習生がいる場合の理由：「他の在留資格に切り替えた」34.2%、「帰国した」30.8%、「他の法人・事業所・施設に移った」23.7%</li> </ul>
4. 施設・事業所の技能実習生に対するOJTの「体制」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 技能実習生のOJTに関わっている技能実習指導員の人数：平均値6.5人、中央値4.0人</li> <li>・ 1人の技能実習生に対し責任を持って関与する技能実習指導員の人数：平均値3.2人、中央値2.0人</li> </ul>
5. 技能実習生に対する実習指導状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指導者間での介助手法や対応方法に関するすり合わせを「よく実施している」、「どちらかといえば実施している」合計：初級91.7%、専門級87.8%</li> <li>・ 指導者間で介助手法や対応方法に相違や齟齬が生じると「とても感じる」、「やや感じる」合計：初級45.7%、専門級41.8%</li> </ul>
6. 技能実習生に対する評価試験に向けた対応の取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 技能実習生が受検する介護技能実習評価試験の試験課題内容を「十分把握している」、「やや把握している」合計：初級の学科試験95.6%</li> </ul>

	<p>初級の実技試験 98.5%</p> <p>専門級の学科試験 90.3%</p> <p>専門級の実技試験 95.0%</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護技能実習評価試験に向けた学習・準備状況：「実技試験に向けた実技講習をしている」89.0%、「試験の過去問題の練習をさせている」80.8%、「実技試験に向けた講習をしている」55.4%、「特段、学習や準備対応はしていない」0.9%</li> <li>・ 「技能実習実施計画」や「介護職種 技能実習評価試験の試験科目及びその範囲並びにその細目」の実習内容を介護技能評価試験前までに全て「十分実施できている」、「やや実施できている」合計： <ul style="list-style-type: none"> <li>初級 96.1%、専門級 95.1%</li> </ul> </li> <li>・ 介護技能実習評価試験後の試験のフィードバックや技術の修正等を「実施している」、「どちらかといえば実施している」合計：初級 71.2%、専門級 66.9%</li> <li>・ 介護技能実習評価試験（講習、模擬試験、試験結果等）を受けて、日ごろの指導方法の「見直しをしたことがある」：初級 36.6%、専門級 30.7%</li> <li>・ 技能実習評価試験の受検に備えた技能実習生の現状スキルの確認方法：「評価基準をもとに、実習指導員による評価を行った」が最も多く、初級 65.7%、専門級 63.4%</li> <li>・ 技能修得に時間を要している技能実習生に対して、できるだけ実習時間を確保できるように、受検日程を「調整したことがある」： <ul style="list-style-type: none"> <li>初級 52.4%、専門級 48.3%</li> </ul> </li> <li>・ 介護技能実習評価試験に向けた対応や受検は、技能実習生間の学習進捗差の「解消に繋がった」、「どちらかと言えば解消に繋がった」合計： <ul style="list-style-type: none"> <li>初級 78.0%、専門級 75.9%</li> </ul> </li> <li>・ 介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて、実習生の業務でみられた姿勢： <ul style="list-style-type: none"> <li>初級 1位 「利用者への声かけができていた」92.4%</li> <li>初級 2位 「手順通りの介助ができていた」81.2%</li> <li>初級 3位 「利用者の体調、様子を観察できていた」77.2%</li> <li>専門級 1位 「利用者への声かけができていた」89.2%</li> <li>専門級 2位 「利用者の体調、様子を観察できていた」86.9%</li> <li>専門級 3位 「利用者の意向を確認できていた」80.7%</li> </ul> </li> <li>・ 技能評価試験に向けた対応において、技能実習生は、学科試験問題（過去問を含む）や実技課題の日本語を「十分理解できていた」、「どちらかといえば理解できていた」合計：94.5%</li> <li>・ 技能評価試験に向けた対応において、技能実習生への日本語教育：「施設・事業所で、業務（OJT）を通じて日本語教育をしている」62.6%、「法人・施設・事業所で、日常生活に係る日本語講習を行っている」35.2%、「法人・施設・事業所で、介護専門用語や実践に係る日本語講習を行っている」30.7%、「特別なことはしていない」7.7%</li> <li>・ 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を、他の介護人材の育成（外国人材/日本人職員等）に「活用している」20.8%、「活用していない」60.6%</li> </ul>
--	--

<p>7. 実技試験課題について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初級：安全衛生業務の指導：「車いすの点検方法の指導」が 86.1%。それ以外の項目は 9 割以上が実施との回答</li> <li>・ 初級：安全衛生業務の実施：「車いすの点検の実施」が 83.3%。それ以外の項目は、9 割以上が実施との回答</li> <li>・ 初級：身体介護業務の指導：いずれの項目も 9 割以上「指導している」との回答</li> <li>・ 初級：身体介護業務の実施：いずれの項目も 9 割以上「実施している」との回答</li> <li>・ 専門級：安全衛生業務の指導：「咳やむせこみが起きたときの対応記録の指導」が 86.8%。それ以外の項目は 9 割以上が実施との回答</li> <li>・ 専門級：安全衛生業務の実施：「咳やむせこみが起きた時の対応記録の実施」84.8%。それ以外の項目は 9 割以上が実施との回答</li> <li>・ 専門級：安全衛生業務の指導：感染症対策について、いずれも 9 割以上「指導している」との回答</li> <li>・ 専門級：安全衛生業務の実施：感染症対策について、いずれも 9 割以上「実施している」との回答</li> <li>・ 専門級：身体介護業務の指導：いずれの項目も 9 割以上「指導している」との回答</li> <li>・ 専門級：身体介護業務の実施：「利用者の残存機能を活かす介助方法の実施」89.7%。それ以外の項目は 9 割以上が実施との回答</li> </ul>
<p>8. 介護技能実習評価試験の実施について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実技試験課題の実施にあたり利用者選定で迷うケース：「よくあった」「ときどきあった」合計 58.8%</li> <li>・ 実技試験課題の実施にあたり利用者の同意が得られないケース：「よくあった」「ときどきあった」合計 18.1%</li> <li>・ 実技試験の実施にあたり試験直前（試験実施日）に利用者を変更した経験：「よくあった」「ときどきあった」合計 23.6%</li> </ul>



## (2) 単純集計結果より

### 技能実習指導について

- ・ 実習指導員間では、初級・専門級のいずれにおいても約9割が指導内容のすり合わせをしつつも、半数近くの回答事業所では、指導者により介護の手法や対応方法の齟齬が生じていると認識されている。

### 介護技能実習評価試験に向けた対応

- ・ 回答事業所の9割以上では、評価試験課題がどのような内容かを把握しており、9割近くの事業所で試験を意識した準備として実技講習を実施している。約8割の事業所では、過去問題の練習を行っている。指導の現場において、技能実習を行うにあたり、実習生が受検する評価試験がどのようなものなのかを把握して指導にあたっていること、またそこに向けた対応準備を行っていることが読み取れる。また評価試験に向けた日本語教育は、9割超の実施となっており、介護技能に関する対応を上回る結果となっている。評価試験に向けては、介護技能のみならず、日本語能力が必須として取り組まれているといえる。

### 介護技能実習評価試験の受検機会

- ・ 回答者の9割超が、評価試験前までに、「技能実習実施計画」や「介護職種技能実習評価試験の試験科目及びその範囲並びにその細目」の実習内容を実施できていると読み取り、技能移転状況の確認としては、技能実習計画を遂行するにあたり、妥当なタイミングで試験の機会が持たれていることが読み取れる。
- ・ 介護技能実習評価試験に向けた対応や受検について、7割以上の事業所において、技能実習生間の学習進捗差の解消に繋がったとの回答であり、技能実習制度として設計されているOJTの仕組みが、機能しているものと読み取れる。この点、アンケートの自由記載に寄せられた意見においても、評価試験があることで目標に向かい勉強ができること、知識や技術の習得具合や熟練度が確認できる機会となっている等、「評価試験」の機会が実習過程の道標になっている実態がうかがえる。

### 介護技能実習評価試験後の取り組み

- ・ 介護技能実習評価試験後の試験のフィードバックや振り返りについては、約7割程度の実施状況であり、3割程度の事業所では受検を受けてのCheckの取組は十分ではないことが読み取れる。
- ・ また評価試験を受けて、日頃の指導方法の見直しがされており、介護技術や指導方法の修正等に繋がっているところは、3割程度に限られる。
- ・ 見直しの内容としては、実習に係る「介護技術」自体を見直したとの回答や、教材の見直し、指導者側の介助内容自体の見直し、指導方法の見直し、指導に用いる日本語表現の見直しなどがあげられ、移転すべき技能と、試験で問われている技能と、平素に提供する技能との整合をはかるべく、軌道修正や改善が図られていることがうかがえる。
- ・ 評価基準を用いた実習指導員による評価・把握を行っている事業所は6割程度に留まり、介護技能実習制度によりOJTが展開されているものの、評価基準を用いて評価を行うという体系的なOJTを行っている事業所は限定的であることが示された。

### 介護技能実習実技評価試験について

- ・ 介護技能実習評価試験について、実技試験課題の内容別に、現場での指導実態と実習生の業務実態を伺ったところ、初級・専門級ともに、指導実態と業務実態は概ね合致しており、実技試験課題と現場実態に特段の乖離は生じていない、と読み取れる。
- ・ アンケート結果のうち、現場の指導実態および業務実態について最も低かったのは、初級の「安全衛生業務」では、車いすの点検であった（指導が 86.1%、実施が 83.3%）。初級の「身体介護業務」においては、いずれの項目も 9 割以上の指導・実施であった。
- ・ 専門級においては、「安全衛生業務」で最も低かったのが、「咳やむせこみが起きたときの対応記録」に関し、指導が 86.8%、実施が 84.8%であり、それ以外はいずれも 9 割以上の指導と実施との回答であった。「身体介護業務」では、全ての項目において指導・実施ともに 9 割以上が実施しているとの回答であり、現場の指導、実習内容、評価試験課題は、整合性が取れているものと読み取れる。
- ・ 実技試験の利用者選定については、6 割近くが選定に迷われたことがあるものの、当日の利用者変更は 2 割程度と、実習実施者の調整により試験実施に至っている実態が読み取れる。

### 介護技能実習評価試験に向けた対応と受検を通じて実習生の業務でみられた姿勢

- ・ 初級受検後の実習生、また専門級受検後の実習生の業務でみられた姿勢について伺ったところ、介護技能、業務姿勢に係る事項において初級段階よりも専門級のほうが高くなる傾向が確認された。
- ・ 特に初級と専門級の差が大きい項目として、「記録ができていた」（24.7 ポイント差）、「ケアの根拠を意識していた」（23.1 ポイント差）、「自立支援の介助ができていた」（16.8 ポイント差）等があげられる。また、「ケアに関する意見交換がされていた」（14.5 ポイント差）、「介助に自信がついたようであった」（12.5 ポイント差）などがあげられる。
- ・ 初級段階では、手順の遵守、といった基本的な行為はなされているものの、実習を通じて介護技能の習得がはかられ、専門級試験受検後の段階では、介護の基本理念の理解、基本理念を踏まえた対応や利用者状態の観察、配慮ができるようになっていく傾向が示されている。また、職場においてケアに対する積極的な意見交換に加わっており、各自の自信につながっているものと読み取れる。
- ・ こうした結果から、介護技能実習制度においては、実習期間が増し、介護技能実習評価試験に向けた対応を重ねるにつれ、着実に介護技能の習得が図られていると読み取ることができる。

### (3) クロス集計結果より

#### ① 技能実習生の現状スキルの把握方法： 評価基準を用いた評価実施/未使用別

アンケート集計結果を受け、事業所・施設のOJT体制の観点から、クロス集計を行ったところ、技能実習生に対して評価基準を用いた評価を行い指導にあたっている群（OJT体制を整備している群）の方が、以下の事項の実施等につき、未使用群よりも高い傾向が確認された。

- ・ 技能実習生の現状スキルの把握方法として「評価基準」を使用して評価を実施している場合、下記の傾向が見られた。
  - 指導者間での介護の手法や対応方法のすり合わせを「よく実施している」傾向
  - 介護技能実習評価試験の試験課題の内容を「十分把握している」傾向
  - 介護技能評価試験前までの実習内容を「十分に実施できている」傾向
  - 介護技能実習評価試験後、試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正の他、指導方法の見直しを行った経験のある事業所・施設が多い傾向
  - 技能実習生間の学習進捗差の「解消に繋がった」傾向
  - 実技課題の日本語を「十分理解できていた」傾向
- ・ 技能実習生の業務で見られた姿勢として、評価基準を用いた評価実施群と未使用群について8ポイント以上差が見られたものとして、初級では、「課題点と次の目標がみえた」（8.6ポイント差）、「利用者のプライバシーに配慮できていた」（8.4ポイント差）、「自立支援の介助ができていた」（8.1ポイント差）等が確認された。また、専門級では、「自立支援の介助ができていた」（13.3ポイント差）、「技能実習指導員への報告ができていた」（11.4ポイント差）、「ケアの根拠を意識していた」（10ポイント差）、「利用者のプライバシーに配慮できていた」（9.2ポイント差）、「課題点と次の目標がみえた」（8.5ポイント差）等の差異が確認された。
- ・ 技能実習生の現状スキル把握として「評価基準」を用いて評価までを行っている事業所・施設では、「評価基準」を用いない評価や、評価未実施の群に比べて、指導方法のすり合わせを図り、計画に即し実行、振り返り（フィードバック）、といった体系的なOJTを行っている傾向がうかがえた。

## ② 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の活用状況別

介護技能実習制度の OJT 手法を他の職員にも活用しているかどうかの観点から、技能実習生への取組につきクロス集計をしてみたところ、以下の傾向が示された。

- ・ 介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法を他の介護人材の育成に活用している場合、下記の傾向が見られた。
  - 指導者間での介護の手法や対応方法のすり合わせを「よく実施している」傾向
  - 介護技能実習評価試験の試験課題の内容を「十分把握している」傾向
  - 介護技能評価試験前までの実習内容を「十分に実施できている」傾向
  - 介護技能実習評価試験後、試験に関する振り返りやフィードバック、技術の修正の他、指導方法の見直しを行った経験のある施設・事業所が多い傾向
  - 技能実習生間の学習進捗差の「解消に繋がった」傾向
  - 学科試験問題や実技課題の日本語の理解度について「十分理解できていた」傾向
- ・ 技能実習生の業務で見られた姿勢では、初級と専門級どちらも「課題点と次の目標がみえた」、「ケアについての勉強の機会が得られた」、「ケアに関する意見交換がなされていた」において介護技能実習評価試験に向けた対応や学習方法の活用有無による差異が大きく、「活用している」方がそれぞれ 10 ポイント以上高い。
- ・ 介護技能実習制度に組み込まれた学習方法を、他の職員に向けても活用している施設・事業所においては、未活用群と比べて、指導方法のすり合わせを図り、計画、実行、振り返りといった体系的な OJT を行っているとの傾向がうかがえた。